令和2年3月2日

非検疫有害動植物の追加に関する病害虫リスクアナリシスの結果

農林水産省　横浜植物防疫所

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
1	節足動物	*Haplothrips robustus*	ハプロスリプス・ロブスタス	アザミウマ目 (Thysanoptera)	クダアザミウマ科 (Phlaeothripidae)	インド、インドネシア、タイ、日本（茨城県、千葉県、東京都、愛知県、香川県）、エジプト、南アフリカ共和国、アメリカ合衆国（カリフォルニア州、ニューメキシコ州）、バード島（ベネズエラ）、メキシコ、オーストラリア、ノーフォーク島、ハワイ諸島	アルファルファ、アスパラガス、マツバギク、ミルスベリヒユ、カヤツリグサ属の一種（*Cyperus lavigatus*）、ギョウギシバ属、スズメガヤ属、ヒイラギギク属、イネ科、キク科、タデ科、ツツジ科、ハマミズナ科、マメ科	成虫は雌のみが知られており、体長は約2.0mm。 *H. varius* に似るが、前胸背板側縁に長刺毛を欠く。 アメリカ合衆国ニューメキシコ州においてレタスを加害した旨の情報があるが、詳細は不明。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。 日本では、マツバギクの花から発見されているが、農作物への寄生の報告はない。 *Haplothrips* 属は、花で繁殖し、寄主植物はキク科及びイネ科の広範囲の属に関係している。	・　薬剤散布（一部の寄主植物では、アザミウマ類で登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) Butler Jr, G. D.,, Usinger, R. L. (1963) Atoll research bulletin. 2) Catalogue of Life (2019) 2019 Annual Checklist. (online), (Accessed_2019/8/14). 3) 桝本雅身 (2011) 植物防疫, 65(7): 441-447. 4) Mound, L. A.,, Matsunaga, J. N. (2017) ZooKeys, (662): 79pp. 5) Mound, L. A.,, Marullo, R. (1996) Memoirs on Entomology, International Volume 6: 286-287. 6) Mound, L. A.,, Wells, A. (2015) Zootaxa, 3964(2): 183-210. 7) O'Neill, K. (1960) Annals of the Entomological Society of America, 53(4): 507-510. 8) Thrips of California (2019) Thrips of California 2012. (online), (Accessed_2019/8/9). 9) Mound, L. A.,, Matsunaga, J. (2017) Zoo Keys, 662 179-92. 10) 安岡拓郎 (2019) 植防研報. 55.（印刷中）
2	節足動物	*Haplothrips nigricornis*	ハプロスリプス・ニグリコルニス	アザミウマ目 (Thysanoptera)	クダアザミウマ科 (Phlaeothripidae)	インド、日本（京都府、西日本）、南アフリカ、マダガスカル	ヒマワリ、マリーゴールド、アカネ科の一種（*Spermacoce hispida* (=*Borreria hispida*)）、キク科の一種（*Delairea odorata*）	雌成虫の体長は、1.4～2.7mm。 ヒマワリの花に軽微な被害がある。本種が強い捕食性をもつことが確認され、特定の数種の植物の花においては、他の雑食性及び植食性の*Haplothrips* 属アザミウマよりも極めて高率で出現する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。 *Haplothrips* 属は、花で繁殖し、寄主植物はキク科及びイネ科の広範囲の属に関係している。	・　薬剤散布（一部の寄主植物では、アザミウマ類で登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) Bilapate, G. G and A. K. Chakravarthy (1999) IPM System in Agriculture. 12 Bioecolgy of Sunflower Pests and Thir Management. 2) Faure (1955) Journal of Entomological Society of South Africa. 18(2) 208-234 3) 中尾史郎 (2017) 雑食性アザミウマの偏食多様性と系統分化との関係解明：生物的防除資材としての展望. (online). 4) McFadyen, R. C. and L. Morin (2012) Senecio madagascariensis Poir. – Fireweed. (online). 5) Grobbelaar, E et. al., (2000) A Survey in South Africa for Insects with Potential as Biological Control Agents for Cape Ivy (Delairea Odorata Lemaire). (online). 6) 京都府 (2014) 植物防疫事業年報. (online). 7) Mound, L. A.,, Matsunaga, J. (2017) Zoo Keys, 662 179-92. 8) Kenji FUJIMOTO, Tadaaki TSUTSUMI, Satoshi TODA and Shiro NAKAO (2019) 京都府立大学学術報告.（印刷中）
3	節足動物	*Phenacoccus solenopsis*	クロテンコナカイガラムシ	カメムシ目 (Hemiptera)	コナカイガラムシ科 (Pseudococcidae)	インド、インドネシア、カンボジア、シンガポール、スリランカ、タイ、台湾、中華人民共和国、日本（愛知県、山口県、高知県、福岡県、佐賀県、鹿児島県、沖縄県）、パキスタン、ベトナム、イラク、イラン、トルコ、オランダ、キプロス、フランス、エジプト、エチオピア、ガーナ、カメルーン、セーシェル、セネガル、ナイジェリア、ベナン、マリ、モーリシャス、レユニオン、アメリカ合衆国、カナダ、アルゼンチン、エクアドル、ガラパゴス諸島、キューバ、グアドループ島、グアテマラ、ケイマン諸島、コロンビア、サン・バルテルミー島、サン・マルタン島、ジャマイカ、チリ、ドミニカ共和国、ニカラグア、ハイチ、パナマ、ブラジル、ベリーズ、マルチニーク島、メキシコ、オーストラリア、ニューカレドニア	オクラ、ゴマ、トマト、ナス、ヒマワリ、ブッソウゲ、ワタ等の50科200種以上の植物	雌成虫は体長2～5mm。本種は有性生殖と単為生殖の両方が知られており、分布地域によって繁殖様式が異なる個体群の存在が示唆されている。幼虫は植物の地下部で越冬し、25～30日で成虫になる。中国では年8～10世代発生する。幼虫及び雌成虫が花、果実、茎葉及び根を加害する。飛翔、歩行、農機具等を介して分散する。 海外ではワタの大害虫として知られている他、トマト、ナス、オクラ、ゴマ、ヒマワリ、ブッソウゲ等においても被害が報告されている。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・　薬剤散布（登録農薬なし。） ・　本種等の早期発見及び寄生部位の除去（幼虫及び成虫の茎葉への寄生と、これらが分泌する甘露及びそれによるすす病を確認した場合、寄生部位を除去し処分する。） ・　ほ場内及び周辺の除草（雑草は本種の発生減となるおそれがある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) 愛知県 (2015) 平成26年度病害虫発生予察特殊報第2号. (online), (Accessed_2016/12/9). 2) CABI (2016) Crop Protection Compendium. Data sheet on Phenacoccus solenopsis. (online), (Accessed_2016/12/8). 3) 福岡県 (2014) 平成26 年度病害虫発生予察特殊報第2号. (online), (Accessed_2016/12/9). 4) Huang F, Zhang J-M, Zhang P-J, and Lu Y-B (2013) Reproduction of the solenopsis mealybug, Phenacoccus solenopsis: Males play an important role. Journal of Insect Science 13:137. (online). 5) 佐賀県 (2013).平成25年度病害虫発生予察特殊報 第1号. (online), (Accessed_2016/12/9). 6) State of Queensland, Department of Agriculture, Fisheries and Forestry (2013) Solenopsis mealybug in Australia – an overview. (online), (Accessed_2016/12/16). 7) Tanaka, H. and T. Uesato (2012) Applied Entomology and Zoology, 47: 413-419. 8) Vennila, S., A. J. Deshmukh, D. Pinjarkar, M. Agarwal, V. V. Ramamurthy, S. Joshi, K. R. Kranthi and O. M. Bambawale (2010) Journal of Insect Science 10(115): 1-9. 9) 山口県 (2016) 平成28年度病害虫発生予察特殊報第2号. (online), (Accessed_2016/12/16). 10) 高知県 (2018) 平成29 年度病害虫発生予察特殊報第2号. (online), (Accessed_2019/9/6). 11) 鹿児島県 (2019) 令和元年度病害虫発生予察特殊報第2号. (online), (Accessed_2019/9/6).

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
4	節足動物	*Curculio dentipes*	コナラシギゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	中華人民共和国、朝鮮半島、日本（北海道、本州、四国、九州）、極東ロシア（シベリア）	クヌギ、コナラ、ドングリ、ブナ科、カシワ類、ナラ類	雌成虫は体長8.9～13.5mm（口器除く。）、口器8.8mm、雄成虫は体長7.9～11.2mm（口器除く。）、口器4.8mm。卵は平均0.93×0.69mm。蛹は長さ7.8mm。年間1、2世代。ふ化した幼虫は果実に食入し、孔道を作り内部深くまで入り込む。加害された果実の表面には茶色い粉が現れる。老熟幼虫は土壌中で越冬する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 寄生果実の除去 ・ 土中の休眠幼虫の駆除	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) 森本桂 (2007) 新訂原色昆虫大図鑑第Ⅱ巻（甲虫編） 2) 徐公天, 楊志華 編 (2007) 中国国林害虫. 4) 蕭剛柔 編 (1991) 中国森林昆虫 第2版. 5) ゾウムシネットワーク (2019) 日本産ゾウムシデータベース. (online), (Accessed_2019/9/6).
5	節足動物	*Curculio conjugaris*	ニセコナラシギゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	朝鮮半島、日本（本州、九州）、東シベリア	アカガシ、ブナ科	成虫は体長7～7.5mm。コナラシギゾウムシよりロ吻が短い。ロ吻でコナラの実が緑のうちに穴をあけて産卵し、幼虫は実の内部を摂食して成長する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) 森本桂 (2007) 新訂原色昆虫大図鑑第Ⅱ巻（甲虫編） 2) ゾウムシネットワーク (2019) 日本産ゾウムシデータベース. (online), (Accessed_2019/9/6). 3) 野生生物ネットワーク（2019）ニセコナラシギゾウムシ. (Online). (Accessed_2019/9/27)
6	節足動物	*Curculio robustus*	クヌギシギゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	中華人民共和国（北京、山東省、浙江省）、日本（本州、九州）	アベマキ、クヌギ、タブラリス	雌成虫は体長5.8～9.5 mm、幅2.7～5.0 mm、雄成虫は体長6.3～8.9 mm、幅3.0～4.2mm。卵は長さ約1.5mm、幅約0.5mm。老熟幼虫は体長9～12mm、幅3.0～4.0mm。年1世代（中華人民共和国山東省泰山市）。有性生殖。交尾後当日産卵し、産卵場所は、殻斗の内皮付近。雌の産卵数は、2～10個、平均6個。1個の果実内への最大産卵数は6個。成虫は、日中は葉や枝の裏面で歩行しており、夕方、雄は特に活発に歩行又は飛翔する。成虫の歩行速度は毎分1.6m。ふ化幼虫は、殻斗内皮及び堅果外皮を加害し、種子内に侵入する。老熟幼虫は堅果とともに地面に落ち、果皮に穴をあけて脱出し、土壌中10㎝深さに潜入して土部屋を作り越冬する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) Higaki, M. (2016) Entomologia Experimentalis et Applicata, 159(3): 338-346. 2) 方徳斉, 王桂欣 (1992) *Curculio robustus* Roelofs, IN 中国森林昆虫第2版（蕭剛柔編）. 3) ゾウムシネットワーク (2019) 日本産ゾウムシデータベース. (online), (Accessed_2019/7/29).
7	節足動物	*Curculio hilgendorfi*	シイシギゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	朝鮮半島、日本（関東、近畿、中国、四国、九州、南西諸島）	オキナワウラジロガシ、オキナワジイ、スダジイ、ツブラジイ、マテバシイ	成虫は体長6～9㎜。本種はシイの堅果に特異的に産卵し、種子を食し、寄生率は高い。シイ類のうち、スダジイとオキナワジイの堅果を主に加害する。雌成虫は、秋にシイの堅果の成長がほぼ完了する頃、ロ吻で樹上の堅果に孔をあけ、長い産卵管を使って産卵する。その後堅果は落果し、数日～数週間後、実を食べた幼虫は堅実に孔をあけて外に出て、土中で越冬する。本種は飛翔するが分散性は低い。 沖縄では堅果への寄生は10～12月に観察され、スダジイ及びオキナワウラジロガシの成熟した堅果に寄生する主要な昆虫である。他の地域と比較して、本種は沖縄で高いまん延率を持ち、より多くの樹種に寄生する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) 青木京子 (2011) 第10回日本植物分類学会奨励賞受賞記念論文. 11(2): 85-97. 2) Aoki, K., Kato, M., & Murakami, N. (2008) Molecular ecology, 17(14): 3276-3289.(Abstr.). 3) Aoki, K., Murakami, N., & Kato, M. (2010) Annals of the Entomological Society of America, 103(3): 379-388. 4) Aoki, K., Kato, M., & Murakami, N. (2011) Insects, 2(2): 128-150. 5) ゾウムシネットワーク (2019) 日本産ゾウムシデータベース. (online), (Accessed_2019/7/29). 6) Teruya, K., Shinzato, T., Kinjo, K., Sasaki, T., & Nakao, T. (2010) Tropics, 18(4): 231-249.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
8	節足動物	*Niditinea fuscella*	ニディティネア・フスセラ	チョウ目 (Lepidoptera)	ヒロズコガ科 (Tineidae)	旧北区、新北区、ナイジェリア、オーストラリア	植物基質、乾燥ジャガイモ、植物製品、シリアル、ドライフルーツ、ラッカセイ製品、コムギ、種子、加工品（毛、羽及び皮）、乾燥動物飼料、毛、貯蔵食料製品、動物遺体、動物製品、鳥の餌、羽	成虫は開張10～18mm。 タンパク性保管製品から発見されている貯蓄食料製品のマイナー害虫である。しばしば節足動物残渣と共に発見され、特にコナダニが発生している製品で発見される。稀に鳥の巣で発見される。コウモリの糞及び鳥の糞に含まれる節足動物遺体並びに人工的な鳥の巣等にある節足動物遺体を広範囲に食することが記録されている。オランダでは、オビガ科 *Thaumetopoea* 属幼虫の巣から発見された報告がある。アメリカ合衆国では、本種の幼虫は、乾燥ジャガイモ、毛素材のマットレス、イザベラタイガーモス（Pyrrharctia isabella：ヒトリガ亜科）の死骸、アメリカンロビン（鳥類コマツグミ）の死骸、乾燥動物飼料、鶏舎、クジラのひげ製品、バッタの卵、コムギ、deer tick（ダニ）の死骸、鳥の餌等、多様な生息場所が報告されている。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 機密性の高い容器の使用 ・ 防虫剤（ナフタリン等）の使用	本種は主に鳥の巣及び鳥の糞に含まれる節足動物残渣を食することが知られている。また、多様な生息場所が報告され、貯蓄食料製品も加害する報告はあるが、被害に関する具体的な情報はない。このため、本種はまん延しても有用な植物に損害を与えるおそれがないと考えられるため、非検疫有害動植物に該当する。	1) Akulov, E. N., N. I Kirichenko & M. G. Ponomarenko (2018) Entomological review, 98(1): 49-75. 2) Catalogue of life (2019) Catalogue of Life. (online), (Accessed_2019/7/12). 3) Cornes, M. A. (1978) The tineid moths of Nigeria with special reference to species likely to be encountered in storage environments. 4) MPG (2019) North America Moth Photographers Group 300164.00 – 0411 – *Niditinea fuscella* – European House Moth – (Linnaeus, 1758). (online), (Accessed_2019/7/16). 5) Gaedike R. (2019) Tineidae II: (Myrmecozelinae, Perissomasticinae, Tineinae, Hieroxestinae, Teichobiinae and Stathmopolitinae). 6) Niewiada, A. (2003) Ochrona Roslin, 47(9): 21-22. (abstr.). 7) Metz, M. A., D. R. Davis, & M. M. Davis (2018) Proceedings of the Entomological Society of Washington, 120(1): 153-167. 8) Zhang, B. C. (1994) Index of economically important Lepidoptera.
9	節足動物	*Eysarcoris ventralis*	シラホシカメムシ	カメムシ目 (Hemiptera)	カメムシ科 (Pentatomidae)	インド、台湾、東南アジア、中華人民共和国、朝鮮半島、日本	イネ科、キク科、マメ科	成虫は体長5～7mm。成虫は堤防、農道、草地（チガヤ、ススキ、ムギ等）、水田に近いスギやヒノキの樹冠部や下草部等で越冬する。春先はメヒシバやエノコログサ等で過ごすが、イネの開花期頃から水田に飛来する。なお、飛翔することはできるが、ほとんどが歩行によって移動する。 イネ科、マメ科及びキク科植物に多く寄生する子実吸汁性カメムシの一種で、イネでは子実粒を吸汁して斑点米を発生させる。マメ類では莢伸長期～子実肥大期に吸汁されると、不稔粒や奇形粒、変色粒が発生する。ただし、ダイズにおける個体数は少なく、被害は軽微である。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、カメムシ類で登録農薬がある。） ・ 飛来源である畦畔の除草（出穂前後ではなく、少なくとも出穂2週間前までには除草を終えるようにする。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2018) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2018/7/14). 2) 梅谷献二 ・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典. 3) 梶原敏宏・梅谷献二・浅川勝 (1986) 作物病害虫ハンドブック. 4) 静岡県植物防疫協会 (2001) 写真で見る農作物病害虫診断ガイドブック 増補版. 5) 日本応用動物昆虫学会 (2006) 農林有害動物・昆虫名鑑, 増補改訂版. 6) 根本文宏・平井一男・森田弘彦 (2004) 防除ハンドブック 稲の病害虫と雑草. 7) 宮本正一 (2008) カメムシ科, 新訂原色昆虫大図鑑 III (平嶋義宏, 森本 桂監修).
10	節足動物	*Halyomorpha halys*	クサギカメムシ	カメムシ目 (Hemiptera)	カメムシ科 (Pentatomidae)	北朝鮮、大韓民国、台湾、中華人民共和国、日本、イタリア、オーストリア、ギリシャ、ジョージア、スイス、スペイン、スロバキア、スロベニア、セルビア、ドイツ、ハンガリー、フランス、ブルガリア、ベルギー、マルタ、リヒテンシュタイン、ルーマニア、ロシア、アメリカ合衆国、カナダ、グアム	エンドウ、カキ、サクランボ、ダイズ、モモ、ユズ、リンゴ、ナツメ属の一種（Ziziphus sativa）等の44科146種の植物	成虫は体長13～18mm。年1回の発生と考えられているが、暖地では2回発生の可能性もある。越冬は成虫で、スギなどの樹皮の間、落葉中、山間地の家屋、作業小屋などの建物の隙間に集合した状態で行われる。卵は約30個が卵塊として産下される。 多食性で、成虫及び幼虫がマメ科植物の子実を吸汁加害するほか、ミカン、カキ、ナシ、モモ、ブドウ、ウメ、カンキツ、ビワ、リンゴ、サクランボなど多くの果実を吸汁する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はないが、大きさや色彩にかなり変異がある旨の報告がある。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、カメムシ類で登録農薬がある。） ・ トラップの設置（ブラックライトトラップ、ベイトトラップ、フェロモントラップ（有効成分：(3S,6S,7R,10S)-10,11-epoxy-1-bisabolen-3-ol、(3R,6S,7R,10S)-10,11-epoxy-1-bisabolen-3-ol 等））	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2019) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2019/6/25). 2) NARO (2019) 日本植物病名データベース. (Online). 3) 梅谷献二 ・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典. 4) 安永智秀・高井幹夫・山下泉・川村満・川澤哲夫 (1993) 日本原色カメムシ図鑑 (友国雅章 監修).
11	節足動物	*Helcystogramma triannulella*	イモキバガ	チョウ目 (Lepidoptera)	キバガ科 (Gelechiidae)	インド、台湾、中華人民共和国、朝鮮半島、日本、ベトナム、トルコ、欧州（コーカサス地方、中央アジア地域、ロシア等）	アサガオ、サツマイモ、セイヨウヒルガオ、ヒルガオ、ヒロハヒルガオ、ムクゲ、ヨウサイ、ヨルガオ、ヒルガオ属	成虫は前翅長7.1～8.4mm、開張13～20mm。老熟幼虫は体長約15mm。枯草、垣根の中などで越冬した成虫は苗床や早掘りサツマイモ畑に飛来、産卵する。発生回数は関東地方では年4回、南九州では6～7回。 幼虫がサツマイモ、ヒルガオ等の葉を加害する。早掘栽培では5～6月のサツマイモ畑の被害、普通栽培では苗床と8月下旬以降の被害が問題となる。一般に盛夏ころの被害は少ない。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はないが、原名亜種はヨーロッパに産し、アジアの亜種*H. triannulella macroscopa* が九州以北の日本各地、台湾、中国及びインドに分布する旨の報告がある。	・ 生物農薬の導入（*Brachymeria lasus*、*Chlaenius bioculatus*）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2018) Crop Protection Compendium. (online), (Accessed_2019/7/12) 2) EPPO (2002) EPPO Global Database. (online), (Last modification_2002/10/4). 3) Kaya K., F. C. Cengiz, M. E. Caliskan and S. Caliskan (2016) Türk. entomol. derg., 2016, 40 (2): 149-156. 4) 九州大学 (2019) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2019/7/12). 5) Kyu-Tek P. and M. G. Ponomarenko (2007) Gelechiidae of the Korean Peninsula and Adjacent Territories. Insects of Korea Series 12. Center for Insect Systematics Korea 2007. 6) Li-zhong H. (2005) List of Chinese Insects Vol.Ⅲ. Sun Yat – sen University Press Guangzhou. 7) 日本応用動物昆虫学会 編 (2006) 農林有害動物・昆虫名鑑 増補改訂版. 8) Ueda T. (1995) Jpn. J. Ent., 63(2): 377-387. 9) 梅谷 献二・岡田 利承 (2003) 日本農業害虫大事典.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
12	節足動物	*Pectinophora gossypiella*	ワタアカミムシ	チョウ目(Lepidoptera)	キバガ科(Gelechiidae)	汎世界的に発生（日本を含む。）	アルファルファ、オクラ、キダチワタ、ケナフ、ケブカワタ、シロバナワタ、ローゼル、アブーチロン属、タチアオイ属、フヨウ属（ハイビスカス）、ワタ属、アオイ科	成虫は体長12～20mm、前翅長は7.5～9mm。卵は長さ0.4～0.6mm、幅0.2～0.3mm。ふ化幼虫は長さ1～2mm、老熟幼虫は12～15mm。蛹は8～10mm。主としてワタの蕾や若い果実に産卵する。卵は通常1個ずつか5～10個の塊で産み付けられる。幼虫はワタの果実を加害し老熟したのち越冬する。アメリカ合衆国では1年間に4～6世代ある。 幼虫がワタの蕾、花に侵入しておしべや子房を加害し、また果実に侵入して未熟種子を加害する。このため、しばしばはなはだしい減収となる。世界的に有名なワタの害虫。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はないが、系統に違いがある（アリゾナ系統は休眠するが、南インドのマンディヤ近くで採取されたインド系統は休眠しない。インド系統は、休眠反応を除いて、他の系統とほとんど変わらないと考えられる。）との報告がある。	・ 生物農薬の導入（*Apanteles angaleti*、*Bracon kirkpatricki* 等） ・ ほ場等の管理（化学物質による落葉、季節終わりの作物の乾燥、晩期の未熟果の除去、短期の品種の使用による管理は、越冬する幼虫の数を減らす。） ・ フェロモントラップの設置	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2018) Crop Protection Compendium. (online), (Accessed_2019/7/17) 2) EPPO (2019) EPPO Global Database. (online), (Last updated_2019/5/17). 3) 九州大学 (2019) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2019/7/18). 4) Li-zhong H. (2005) List of Chinese Insects Vol.Ⅲ. Sun Yat – sen University Press Guangzhou. 5) 日本応用動物昆虫学会 編 (2006) 農林有害動物・昆虫名鑑 増補改訂版. 6) Raina, A. K. and R. A. Bell (1974) Annals of the Entomological Society of America, 67(4): 685-686. 7) Raina, A. K., R. A. Bell and R. B. Carlson (1977) Annals of the Entomological Society of America, 70(4): 628-630. 8) 梅谷 献二・岡田 利承 (2003) 日本農業害虫大事典. 9) 矢田脩 (2007) 原色昆虫大図鑑.
13	その他無脊椎動物	*Helix aspersa*	ヒメリンゴマイマイ	柄眼目(Stylommatophora)	エスカルゴ科（Helicidae）	中華人民共和国、日本（茨城県、千葉県、東京都、大阪府）、フィリピン、イスラエル、サウジアラビア、シリア、トルコ、レバノン、アイルランド、アルバニア、アンドラ、イタリア、ウズベキスタン、英国（グレート・ブリテン及び北アイルランドに限る。）、オーストリア、オランダ、キプロス、ギリシャ、クロアチア、スウェーデン、スペイン、ドイツ、フランス、ベルギー、ポルトガル、マルタ、ルクセンブルク、ロシア、アルジェリア、エジプト、セーシェル、セント・ヘレナ島、チュニジア、モーリシャス、モロッコ、リビア、レソト、南アフリカ地域、アメリカ合衆国、カナダ、アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、ガイアナ、コロンビア、チリ、ハイチ、ブラジル、仏領ギアナ、ベネズエラ、ペルー、マルティニーク島、メキシコ、オーストラリア、ニューカレドニア、ニュージーランド、ノーフォーク島、仏領ポリネシア	雑食性（アボカド、インゲンマメ、キャベツ、クロフサスグリ、タマネギ、チシャ、トウモロコシ、トマト、ビルス・コンムニス、フダンソウ、ホンアンズ、アブラナ属、オランダイチゴ属の一種（*Fragaria ananassa*）、トウガラシ属、ミカン属）	成貝では殻径25～40mm、殻高25～30mmになる大型の陸貝。成貝は1年に2～3回産卵し、1回の産卵で100個前後の卵を土中に産む。卵は14～40日でふ化し、成貝になるまでにおよそ2年を要する。寿命は3～5年と推定されているが、室内では、10年生きた記録もある。活動は日没からおよそ約2時間後と6時間後に活発化し、日中も雨が降っていれば活動する。冬期は土中や石の隙間などで休眠する。 各種野菜、果実及び花き等を加害するほか、這った後に残される粘液により商品価値が下がる。カリフォルニアではカンキツ類への被害が報告されている。カリフォルニアでは、カンキツ類への被害が報告されている。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、カタツムリ類で登録農薬がある。） ・ 人力による捕殺 ・ 忌避効果のある銅や石灰を設置	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2018) Crop Protection Compendium. (online), (Last modified_2018/9/27). 2) Basinger (1931) The European Brown Snail In California. 3) Pfleger, Vaclav. (1998) Molluscs. 4) Godan, D. (1983) Pest Slugs and Snails. 5) 茨城県神栖市 (2019) 外来カタツムリ（ヒメリンゴマイマイの発生）. (online), (Accessed_2019/9/12). 6) 千葉県銚子市 (2019) 外来カタツムリの調査について. (online), (Accessed_2019/9/12). 7) 東京都江戸川区 (2019) 外来種生物について. (online), (Accessed_2019/9/12). 8) 大阪府門真市 (2019) 外来カタツムリ(ヒメリンゴマイマイ) 学名*Helix aspersa*（ヘリックス アスペルサ）. (online), (Accessed_2019/9/12).
14	節足動物	*Chlorophorus annularis*	タケトラカミキリ	コウチュウ目(Coleoptera)	カミキリムシ科(Cerambycidae)	インド、インドネシア、シンガポール、スリランカ、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、日本（北海道を除く。）、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオス、東ティモール、アメリカ合衆国、北マリアナ諸島、グアム、パプア・ニューギニア、ハワイ諸島、ミクロネシア連邦	サトウキビ、ホウライチク、ダイサンチク、ツベルキュラツス、トウモロコシ、インドササ属の一種（*Indosat crassiflora*）、ブドウ属、ホウライチク属、マチク属の一種（*Dendrocalamus strictus*）、マダケ属の一種（*Phyllostachys reticulata*）、ミカン属、ワタ属	卵は直径1.5mm、短径0.6mm前後。幼虫は終齢で体長15mm～20mm前後。成虫は体長9～16mm。 産卵は乾燥した切られた竹で行われる。1齢幼虫は、竹材の壁に不規則な穴を開け、フラスと竹片を詰める。幼虫は材内を加害し、フラスは孔道内に堅く詰めるため外部に排出されない。幼虫態で越冬し、翌年の5～6月に蛹化する。成虫は7月中旬～8月下旬にかけて被害竹から散発的に脱出する。寿命は長いもので100日に達する。生活史は1年で完了することができるが、乾燥竹材は栄養価が低いため、2年又はそれ以上の期間を要する。 サトウキビでは特に重要ではない。竹は高価値な装飾上の植物である可能性があるため、本種は重要な害虫の可能性がある。米国では、潜在的な苗木の害虫とされている。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 本種が付着した竹材の除去と破壊 ・ 温湯浸漬（56℃で30分間又は38～55℃で48時間浸漬により殺虫する。） ・ 幼虫と成虫に対する化学的処理（くん蒸は高価であり、化学的な処理は、費用のためにほとんど又は全く価値がない場合がある。） ・ 竹材の保護（5日間水に浸し、その後、屋根付きの小屋で数日間乾燥させ、最後に原油に2日間浸す方法がある。各種竹材を加工後、薬剤（ホウ素化合物＋アルキル・アンモニコウム）を真空加工注入する。） ・ 生物農薬の導入（多寄生のコマユバチ科の一種ホソバネカマキリコマユバチとクロアリガタバチ）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2018) Crop Protection Compendium. (online), (Last modified_2018/11/06) 2) 小林富士夫・竹谷明彦 (2010) 森林昆虫. 3) 小島圭三・中村慎吾 (2011) 日本産カミキリムシ食樹総目録. 4) 日本応用動物昆虫学会 編 (2006) 農林有害動物・昆虫名鑑 増補改訂版.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
15	節足動物	*Orthotomicus proximus*	マツカワノキクイムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	キクイムシ科 (Scolytidae)	中華人民共和国、朝鮮半島、日本、欧州	アカマツ、エゾマツ、クロマツ、ゴヨウマツ、チョウセンゴヨウ	成虫は体長3.3mm内外。成虫及び幼虫が樹皮下に掘るトンネル状の加害痕が見られる。本種は、植物の様々な部分に穿孔して基質を食べるバークビートルであるが、皮部よりも木質部を多く加害する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、キクイムシ類で登録農薬がある。） ・ 間伐の実施（間伐による伐採木や枝が増殖源となるため、林内に放置しない。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) Nobuchi, A. (1974) Bulletin of the Government Forestry Experiment Station. No. 266: 30-60. 2) 井上元則 (1971) 森林防疫. 20(7): 155-161. 3) 岩田隆太郎 (2017) 木質昆虫学序説. 4) 諸見里秀宰 (1958) 琉大農家便り. 34: 4-6. 5) 野淵輝 (1966) 林試研報. 185: 1-56. 6) 高橋寿郎 (1998) てんとうむし.12: 14-29. 7) 山根明臣 (1988) GREEN AGE: 27-33.
16	節足動物	*Xyleborus perforans*	フィリピンザイノキクイムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	キクイムシ科 (Scolytidae)	インド、インドネシア、カンボジア、スリランカ、シンガポール、タイ、台湾、中華人民共和国、日本（小笠原諸島、南西諸島）、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、モルディブ、ラオス、スペイン、ポルトガル、ウガンダ、ガーナ、カナリア諸島、カーボベルデ、ガボン、カメルーン、ケニア、コートジボワール、コモロ、コンゴ共和国、コンゴ民主共和国、サントメ・プリンシペ、シエラレオネ、セーシェル、ソマリア、タンザニア、ナイジェリア、ブルンジ、マダガスカル、マデイラ諸島、マラウイ、モーリシャス、ルワンダ、レユニオン、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、北マリアナ諸島、キリバス、グアム、クック諸島、クリスマス島、ココス諸島、サモア、ソロモン諸島、トンガ、ニウエ、ニューカレドニア、バヌアツ、パプアニューギニア、パラオ、ハワイ諸島、フィジー、仏領ポリネシア、米領サモア、マーシャル諸島、ミクロネシア	アボカド、オオバヒルギ、カカオ、カシューナッツ、ギンネム、ココヤシ、ザクロ、サトウキビ、サラノキ、ドリオバラノブス・アロマティカ、ナンヨウスギ、パパイヤ、パラゴムノキ、パラミツ、バンカヌス、バンレイシ、ボスウェリア・セルラータ、フイリンシンカ、マカダミアナッツ、マンゴウ、アカシア属の一種（*Acacia mangium*）、アガチス属の一種（*Agathis macrophylla*）、イチジク属、キワタ属の一種（*Bombax ceiba*）、トーナ属の一種（*Toona ciliata*）、ミカン属、ネムノキ属、ユーカリノキ属	雌成虫は体長2.1～2.5mm。1世代は4～6週間かかると予想される。本種が発生しているほとんどの国では、繁殖は年間を通して行われる。雌成虫は飛翔して移動し、分布を拡大する。木材、ダンネージ及び木枠内に寄生した木材梱こん材は、本種の分散方法として重要である。 本種は、健全木に寄生することは知られていない。本種は被害を受けた木に寄生する可能性があるが、伐採後間もない木材に主に寄生する。本種の加害を受けた植物は、しおれ、枝の枯死、シュートの破損、衰弱、日焼け又は活力の全般的な低下の症状を示すことがある。本種は、インドネシアではサトウキビやココナッツ害虫として記録されている。本種の加害により、ビール、ワイン、ラム酒の木の樽では、漏出の原因となっていた。本種の加害の結果、木材に多数のピンホールとその周囲に発生する真菌による染みが生じ、木材は家具や化粧板に使用できない可能性がある。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、キクイムシ類で登録農薬がある。） ・ 寄生植物の廃棄 ・ トラップの設置（エタノールと餌によるトラップにより本種を捕獲する。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2018) Crop Protection Compendium. (online), (Last modified_2018/11/16). 2) EPPO (2002) EPPO Global Database. (online), (Last modification_2002/10/07). 3) 野淵輝 (1978) 林業試験場研究報告, 第301号別刷: 41pp.
17	節足動物	*Xyleborus volvulus*	ユズリハノキクイムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	キクイムシ科 (Scolytidae)	インド、インドネシア、タイ、大韓民国、台湾、日本（北海道を除く。）、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、アンゴラ、ウガンダ、エチオピア、ガーナ、ガボン、カメルーン、ギニア、ケニア、コートジボワール、コンゴ共和国、コンゴ民主共和国、ザンビア、ジンバブエ、スーダン、赤道ギニア、セーシェル、ソマリア、タンザニア、ナイジェリア、ナミビア、ブルンジ、マダガスカル、南アフリカ共和国、モザンビーク、モーリシャス、ルワンダ、アメリカ合衆国、アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、エルサルバドル、ガイアナ、キューバ、グアテマラ、グアドループ、グレナダ、コスタリカ、コロンビア、ジャマイカ、スリナム、チリ、ドミニカ、トリニダード・トバゴ、ニカラグア、パナマ、バミューダ諸島、パラグアイ、プエルトリコ、ブラジル、仏領ギアナ、ベネズエラ、ペルー、ボリビア、ホンジュラス、メキシコ、オーストラリア、サモア、ソロモン諸島、パプアニューギニア、フィジー、仏領ポリネシア	アボカド、オオバヒルギ、カカオ、カシューナッツ、ギンネム、ココヤシ、サトウキビ、サラノキ、ドリオバラノブス・アロマティカ、ナンヨウスギ、パラミツ、パパイヤ、パラゴムノキ、バンカヌス、バンレイシ、ボスウェリア・セルラータ、フイリンシンカ、マカダミアナッツ、マンゴウ、モモタマナ、アカシア属の一種（*Acacia mangium*）、アガチス属の一種（*Agathis macrophylla*）、イチジク属、キワタ属の一種（*Bombax ceiba*）、デイゴ属、トーナ属の一種（*Toona ciliata*）、ネムノキ属、ミカン属、ユーカリノキ属	成虫は体長2.4～2.8mm、長さは幅の約2.8倍。 本種は、二次穿孔者であるが、被害を受けた木に加害する可能性があり、伐採後間もない木材では非常に多く見られる。本種は、多食性の種であり、アンブロシア真菌の生育に適した環境を提供する、適切なサイズの木であればほとんど繁殖することができる。本種の寄生部位は、生長点、葉、幹及び植物全体であり、その症状としては、生長点では枯死、葉では黄変又は枯死、幹では枯死、内部加害、壊死及び萎ちょう、植物全体ではフラスの流出、及び枯死である。本種の分散の経路としては、樹皮地上の茎、シュート、幹、枝及び木材がある。木材こん包材についても本種の分散の経路として知られている。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はないが、アンブロシア真菌を媒介する旨の報告がある。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、キクイムシ類で登録農薬がある。） ・ 寄生植物の廃棄 ・ トラップの設置（エタノールと餌によるトラップにより本種を捕獲する。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2018) Crop Protection Compendium. (online), (Last modified_2018/11/16) 2) Catalogue of Life (2019) Catalogue of Life. (online), (Accessed_2019/7/18). 3) EPPO (2019) EPPO Alert List - *Raffaelea lauricola* (laurel wilt) and its insect vector (*Xyleborus glabratus*). (online), (Accessed_2019/7/18). 4) 林匡夫・森本桂・木元新作 (1984) 原色日本甲虫図鑑（Ⅳ）. 5) NARO (2019) 日本植物病名データベース. (online), (Accessed_2019/7/22). 6) 野淵輝 (1978) 林業試験場研究報告, 第301号別刷: 41pp.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
18	節足動物	*Corcyra cephalonica*	ガイマイツヅリガ	チョウ目 (Lepidoptera)	メイガ科 (Pyralidae)	汎世界的に発生（日本（北海道、神奈川県、鹿児島県、沖縄県）を含む。）	イチジク、イネ、カカオ、キビ、キマメ、キャッサバ、ゴマ、コムギ、ササゲ、トウガラシ、トウモロコシ、ニクズク、ヒヨコマメ、ホンアンズ、モロコシ、ラッカセイ、コムギ属、サクラ属の一種（*Prunus dulcis*）、ササゲ属の一種（*Vigna radiata*）、チカラシバ属の一種（*Pennisetum glaucum*）、ワタ属	成虫は開張14～25 mm。蛹は体長7.5～12mm。幼虫は体長11～20mm。卵は0.5×0.3mm。成虫の寿命は1～2週間。貯蔵穀物上で見られ、夕方、活発に飛翔する。年3～4化。 幼虫が穀類、豆類、乾果、ナッツ類を加害する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ くん蒸剤の使用（貯蔵穀類等では、リン化アルミニウム、二酸化炭素くん蒸剤で登録がある。） ・ 穀類等の貯蔵中の管理（餌となる食品の粉等を除去する。貯蔵中は空気を通し、水分量や気温を低くする。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2012) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2012/12/12). 2) EPPO (2016) PQR - EPPO. (online), (Accessed_2016/08/04). 3) 広渡俊哉 (2004) 屋内でみられる小蛾類. 4) 木村悟郎・末竹由宏・生田秀・谷口将史・宮ノ下明大・富岡康浩・谷川力 (2016) Medical Entomology and Zoology, 67(2): 83-85. 5) 駒井古実・吉安裕・那須義次・斉藤寿久 (2011) 日本の鱗翅類-系統と多様性. 6) 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則 (2013) 日本産蛾類標準図鑑Ⅳ. 7) 梅谷献二 (2012) 原色図鑑　外来害虫と移入天敵. 8) 梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典Ⅳ.
19	節足動物	*Conogethes punctiferalis*	モモノゴマダラノメイガ	チョウ目 (Lepidoptera)	ツトガ科 (Crambidae)	インド、北朝鮮、大韓民国、台湾、中華人民共和国、東南アジア、日本、ネパール、イラク、英国（グレート・ブリテン及び北アイルランドに限る。）、オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニア	アンズ、オウトウ、マルメロ、リンゴ等のバラ科果樹等の33科56属の植物	成虫は体長12mm、開張23～30mm。蛹の体長は14mm内外、幅4mm。終齢幼虫は体長20～25mm。卵は楕円形で、直径0.6～2.5mm。東北地方や新潟県では成虫が年2回発生。関東南部以西では一部3回発生。終齢（5齢）幼虫時に寄主植物の茎や果実、果樹の樹皮の下で越冬。 幼虫は果樹の果実に食入し、草本類の子実、花頭も食べる。日本では主にモモ、スモモに寄生し、次いでクリに多く、その場で越冬し羽化後に再びモモ、スモモへ移る。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、シンクイムシ類で登録農薬がある。） ・ 生物農薬の導入（*Bacillus thuringiensis* subsp. *kurstaki*） ・ トラップの設置（性フェロモン、光、砂糖酢を誘引剤として使用する。） ・ 果実の保護（紙袋を被せ、産卵及び侵入を防止する。） ・ ほ場の管理（越冬場所である樹皮の剥皮、収穫後の枝の焼却で越冬数を減らす。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/01/20). 2) EPPO (2016) PQR - EPPO. (online), (Accessed_2016/07/27). 3) Inoue, H., Yamanaka, H. (2006) TINEA, 19(2): 80-91. 4) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/07/28). 5) 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則 編 (2013) 日本産蛾類標準図鑑Ⅳ. 6) Stanley, J., Chandrasekaran, S., and Preetha, G. (2009) Journal of Agricultural Sciences, 79(11): 906-909. 7) Swaine.G., D.A.Ironside., R.J.Corcoran (1991) Insect pests of fruit and vegetables. 8) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典.
20	節足動物	*Cydia kurokoi*	クリミガ	チョウ目 (Lepidoptera)	ハマキガ科 (Tortricidae)	中華人民共和国、朝鮮半島、日本（南西諸島を除く。）	アマグリ、クヌギ、クリ、モーパングリ、クリ属、コナラ属（カシ属）	成虫は開張12～22mm、雄はやや小型である。蛹は体長約10mm。幼虫は老熟すると体長12～20mm。年1世代。幼虫は浅い土中に繭を作って越冬に入る。成虫は1～2週間前後生存する。昼間は葉裏に静止しており日没とともに飛翔活動し、交尾産卵する。 クリでは、果実痕と幼虫の成育にともなう果肉の加害により、商品価値を著しく低下させる。日本では、関東地方での被害は少なく、中部地方より南部に多い。9月下旬以後収穫する品種に被害が多い。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、クリミガで登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) Brown, J. W. and F. Komai. (2008) Tropical Lepidoptera Research, 18(1): 2-4. 2) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/05/15). 3) 江崎悌三・一色周知・六浦晃・井上寛・岡恒弘・緒方正美・黒子浩 (1958) 原色日本蛾類図鑑（下巻）. 4) Ihara, F., M. Toyama, M. Higaki, K. Mishiro and K. Yaginuma (2009) Applied Entomology and Zoology, 44(1): 127-132. 5) 伊藤国彦・槙本精二 (1990) 岡山県立短期大学研究紀要, 33: 193-218. 6) 駒井古実・石川光一 (1987) 日本応用動物昆虫学会誌, 31(1): 55-62. 7) 駒井古実・吉安裕・那須義次・斉藤寿久 (2011) 日本の鱗翅類　系統と多様性. 8) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/11/18). 9) 六浦晃・山本義丸・服部伊楚子・黒子浩・児玉行・保田淑郎・森内茂・斉藤寿久・一色周知 (1991) 原色日本蛾類幼虫図鑑（下巻）. 10) 中垣至郎・藤野宣博 (1987) 関東東山病害虫研究会年報, 34: 171-172. 11) 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則 編 (2013) 日本産蛾類標準図鑑IV. 12) 日本応用動物昆虫学会 編 (2006) 農林有害動物･昆虫名鑑 増補改訂版. 13) 農文協 (2005) 原色果樹病害虫百科〈4〉モモ・ウメ・スモモ・アンズ・クリ. 14) 坂神泰輔・工藤晟　編 (2003) ひと目でわかる 果樹の病害虫 -第二巻(改訂版)- ナシ・ブドウ・カキ・クリ・イチジク. 15) 梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
21	節足動物	*Cydia glandicolana*	サンカクモンヒメハマキ	チョウ目(Lepidoptera)	ハマキガ科(Tortricidae)	大韓民国、中華人民共和国、日本（北海道、本州、四国、佐渡島、対馬、屋久島に生息。九州にも存在する可能性がある。）、ロシア（旧ソビエト連邦）	アベマキ、アマグリ、カシワ、コナラ、モンゴリナラ、クリ属、コナラ属（カシ属）、ブナ科	成虫は開張14～19mm、前翅長5～9mm。幼虫は頭幅1.2～1.4mm、体長17mm 内外。年1世代。幼虫はクリやカシワ等の堅果に食入し、老熟幼虫は秋に堅果を脱出し、落葉層中に繭を作り、幼虫態で越冬する。 幼虫の一部は果梗を噛み切り総苞を成熟前に脱落させる。幼虫の多くは果実内に食入して子葉を加害し、成熟期までに果実の減産を引き起こす。中華人民共和国ではクリの重要な害虫である。遼寧省丹東地区ではクリの被害率は毎年30～40%、ひどいときには約70%前後になる。日本と大韓民国では本種がクリを加害した記録はない。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、ハマキムシ類で登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) Brown,J.W and F.Komai (2008) TROPICAL LEPIDOPTERA, 18(1): 2-4. 2) CABI (2008) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2008/05/15). 3) Fukumoto, H. and H. Kajimura (1999) Entomological Science, 2(2): 197-203. 4) 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛 (1982) 日本産蛾類大図鑑. 5) 神保宇嗣・ニワカガマニア・蛾LOVE (2016) みんなで作る日本産蛾類図鑑. (online), (Accessed_2016/03/29). 6) 環境省 (2010) 平成21年度那須高原集団施設地区自然環境把握請負業務報告書. (online). 7) 駒井古実 ・石川光 (1987) 日本応用動物昆虫学会誌, 31(1): 55-62. 8) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/10/05). 9) Maeto, K. (1995) Nippon Rin Gakkai-Shi, 77(3): 213-219. 10) Meijerman, L. and S.A. Ulenberg (2016) Arthropods of Economic Importance: Eurasian Tortricidae. (online), (Accessed_2016/10/27). 11) Park, K. and S. Ahn (1987) Korean Jounal of Plant Protection, 26(4): 181-187. 12) 蔡晶雪, 张爱环, 张民照, 孙淑玲, 陈红梅, 李征 (2010) Preliminary report on Olethreutinae from Mt. Wuling Natural Reserve(Lepidoptera: Tortricidae). 中国科技论文在线. (online). 13) Syachina A. A. and V. V. Dubatolov (2009) Entomological Review, 89-5: 333-342. 14) 蕭剛柔 (1992) 中国森林昆虫 第2版(増訂本). 15) Umetsu,K. (2016) 秋田県立博物館研究報告, 41: 5-24.
22	節足動物	*Acanthoscelides obtectus*	インゲンマメゾウムシ	コウチュウ目(Coleoptera)	マメゾウムシ科(Bruchidae)	汎世界的に発生（日本（北海道、沖縄県）を含む。）	インゲンマメ、エンドウ、ガラスマメ、キマメ、ササゲ、ソラマメ、ダイズ、トウモロコシ、ヒヨコマメ、ベニバナインゲン、インゲン属、ササゲ属の一種（*Vigna angularis* 、*Vigna radiata* ）、リュウキュウマメ属の一種（*Cajanus indicus* ）	成虫は体長3～4.5mm。北海道では年1化。ただし、一般家屋内では冬期間の暖房のために数回の発生が可能である。インドでは1年に3～4世代発生。成虫は餌を食べず、飛翔能力は弱い。 莢、子実に寄生する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、インゲンマメゾウムシで登録農薬がある。） ・ くん蒸剤の使用（リン化アルミニウム、二酸化炭素くん蒸剤で登録がある。） ・ 低温処理（本種の発育零点11℃以下で保管する。） ・ 冷蔵処理（インゲンマメを55℃で最低3～4時間又は－15～－20℃で最低12時間処理により殺虫する。） ・ 寄生植物の残渣の除去	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/01/20). 2) 梅谷献二 (1987) マメゾウムシの生物学. 3) Savkovi U., I. Vuckovi and B. Stojkovi (2012) Journal of Stored Products Research, 50: 66-72. 4) 伊東拓也・浦口宏二・高橋健一 (2006) Hokkaido Inst. Pub. Health. 56: 101-103. (online). 5) Thakur, D.R. (2010) Invasion and threats of *Acanthoscelides obtectus* (Say) (Coleloptera: Bruchidae) to kidney beans in India - a first record International Working Conference on Stored Product Protection. 6) 梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大辞典.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
23	節足動物	*Lyctus africanus*	アフリカヒラタキクイムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ヒラタキクイムシ科 (Lyctidae)	インド、インドネシア、タイ、中華人民共和国、日本（宮城県、東京都、静岡県、愛知県、三重県、大阪府、奈良県、京都府、兵庫県、広島県、山口県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県）、パキスタン、フィリピン、ミャンマー、イスラエル、イラン、トルコ、ポルトガル、エジプト、エチオピア、ケニア、コートジボワール、コンゴ民主共和国、シエラレオネ、スーダン、セネガル、チャド、中央アフリカ、ニジェール、マダガスカル、マリ、南アフリカ共和国、モザンビーク、パプアニューギニア	キリ、パパイヤ、パラゴムノキ、ビロードアオイ、カンゾウ属、コナラ属（カシ属）、キワタ属の一種（*Bombax ceiba*）、ショウガ属、チャンチン属、ハカマカズラ属、ホウライチク属の一種（*Bambusa bambos*）、マチク属の一種（*Dendrocalamus strictus*）、マホガニー属、イネ科、フタバガキ科	成虫の体長は2.5～4mm。昼行性で,昼間活発に行動する。本州から九州の冬期の最低気温は本種の許容生存温度を下回るものと推定されるが、温暖地や暖房完備の建物中では1年2世代以上の発生が可能と思われる。 デンプン含量が3%以上の硬材の白太を加害する。細菌の作用等によりデンプン含量が減少した、伐採後約10～15年経過した材木への加害は不可能になる。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（一部の寄主植物では、キクイムシ類で登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) Beaver, R. A., W. Sittichaya and L. Liu. (2011) Tropical Natural History, 11(2): 135-158. 2) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/01/20). 3) El-Sebay, Y. and H. Helal (1995) Egyptian Journal of Agricultural Research, 73(1): 71-81. 4) EPPO (2016) EPPO-PQR. (online), (Accessed_2016/06/10). 5) 古川法子・吉村剛・今村祐嗣 (2009) 木材保存, 35(6): 260-264. 6) Gerberg, E. J. (1957) Technical Bulletin, No. 1157: 17-18. 7) Haojie, W., X. Tiansen and V. R. Varma (2002) Insect Pests of Bamboos in Asia - An Illustrated Manual (4/4). 8) 岩田隆太郎 (1988) 家屋害虫, 35,36: 45-54. 9) 黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之　編 (2007) 原色日本甲虫図鑑（Ⅲ）. 10) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/06/24). 11) 野淵輝 (1992) 木材保存, 18(4): 190-200. 12) PaDIL (2016) *Lyctus africanus* Pests and Disease Image Library. (online), (Accessed_2016/08/09). 13) 田中和夫・山野倫子 (1997) 家屋害虫, 19(2): 84-85.
24	節足動物	*Gryllodes sigillatus*	カマドコオロギ	バッタ目 (Orthoptera)	コオロギ科 (Gryllidae)	インド、北朝鮮、スリランカ、大韓民国、台湾、日本（北海道を除く。）、マレーシア、欧州、南アフリカ共和国、モーリシャス、アメリカ合衆国、アルゼンチン、パナマ、ブラジル、メキシコ、オーストラリア、ハワイ諸島	雑食性	雌成虫は体長12.1～22.2mm、雄成虫は体長14.0～20.0mm。雄成虫の平均寿命は73.62日、雌成虫の平均寿命は50.42日。舗装道路の割れ目等に潜み、夜間にエサや繁殖相手を探すために出てくる。雌は土壌や落葉落枝に卵を産む。休眠性はもたず、好適環境においては、通年繁殖する。 雑食性で、夜間に芝生や死虫を食べるが、牧草やその他の経済的に重要な作物を加害しない。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、芝生や死虫を食べるが、牧草やその他の経済的に重要な作物を加害しないとの情報がある。また、本種は国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) Australian Government Department of the Environment and Energy (2016) *Gryllodes sigillatus* (Decorated Cricket) Department of the Environment and Energy. (online). 2) Catalogue of life (2016) Catalogue of life. (online), (Accessed_2016/04/28). 3) 平嶋義宏・森本桂 (2008) 新訂 原色昆虫大圖鑑 第Ⅲ巻. 4) 市川顕彦・伊藤ふくお・加納康嗣・河合正人・富永修・村井貴史 (2006) バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 5) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/04/27). 6) Otte, D and R. D. Alexander (1983) THE AUSTRALIAN CRICKETS (ORTHOPTERA: GRYLLIDAE): 160-162. (online).
25	節足動物	*Mussidia pectinicornella*	クシヒゲマダラメイガ	チョウ目 (Lepidoptera)	メイガ科 (Pyralidae)	インド、インドネシア、スリランカ、タイ、台湾、東南アジア、日本、ブータン、マレーシア、ミャンマー、パプアニューギニア、フィジー	カカオ、ネジレフサマメノキ、モモ、モモイロナンバンサイカチ、カワラケツメイ属、キンキジュ属、ハカマカズラ属、パルキア属、タヌキマメ属の一種（*Crotalaria lunata*）、ナタマメ属の一種（*Canavalia ensiformis*、*Canavalia lineata*）、ネフェリューム属の一種（*Nephelium ophiodes*）、マメ科の一種（*Delonix regia*、*Pongamia pinnala*）	成虫は開張23～33mm。終齢幼虫は体長16mm。日本では年2化。産卵数は、南西諸島では多産。幼虫は年間通して、ネジレフサマメノキの半熟の種子に穴を空ける。その傷はさやを開けるまで見えず、種子の被害率は乾季で最大75%、雨季で20～30%である。また、モモ乾燥果実にも穿孔し内部を摂食する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2016) Crop Protection Compendium. (online), (Accessed_2016/07/12). 2) Gaden, S. R., P. R. Ackery, I. J. Kitching, G. W. Beccaloni and L. M. Hernández (2001) Hostplants of the moth and butterfly caterpillars of the Oriental Region: Mussidia pectinicornella. 3) Gaden, S. R., R. K. Tuck and M. Schaffer (1994) A Field guide to the smaller moths of South-East Asia Mededelingen van het Algemeen Proefstation voor den Landbouw. 4) 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛 (1982) 日本産蛾類大図鑑Ⅰ. 5) 駒井古実・吉安裕・那須義次・斉藤寿久 (2011) 日本の鱗翅類　系統と多様性. 6) 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則編 (2013) 日本産蛾類標準図鑑Ⅳ. 7) Van Der Goot, P. (1940) Pithecolobium lobatum and Parkia speciosa. Mededelingen van het Algemeen Proefstation voor den Landbouw.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
26	節足動物	*Cassida circumdata*	タテスジヒメジンガサハムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ハムシ科 (Chrysomelidae)	インド、インドネシア、スリランカ、タイ、台湾、中華人民共和国、日本（大阪府、中硫黄島、八丈島、南西諸島）、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、マレーシア、ラオス、ハワイ諸島、ミクロネシア	コダチアサガオ、サツマイモ、ノアサガオ、ハマヒルガオ、ヨウサイ、サツマイモ属、セイヨウヒルガオ属の一種（*Convolvulus nummularis*）、ヒルガオ属、ヒルガオ科の一種（*Merremia emarginata*）	成虫は体長4～5mm。蛹は体長4.5～5㎜。幼虫は終齢で6.5mm。葉面に産卵する。成虫で越冬する。年数回発生するが、日本での世代数は不明。中国南部では年間で5～6世代発生すると考えられている。 成虫・幼虫ともに葉を加害し、網目状の穴をあける。寄主範囲は広くなく、成虫・幼虫ともにサツマイモ、ヨウサイ及びハマヒルガオの葉を加害する。また、八丈島では、アサガオへの加害も確認されている。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) Bruegmann, M. M. (1999) Bishop Museum Occasional Papers, 56: 1-70. 2) CABI (2016) Crop Protection Compendium. (online), (Accessed_2016/03/24). 3) 林匡夫・森本桂・木元新作 編著 (1984) 原色日本甲虫図鑑Ⅳ. 4) 森本　桂　監修 (2007) 新訂原色昆虫大圖鑑Ⅱ. 5) Lech Borowiec (2001) New records of Asian and Australopapuan Cassidinae, with a description of five new species of Cassida L. from Thailand (Coleoptera: Chrysomelidae: Cassidinae), Vol.12(4). 6) Chi-Feng Lee, Hsing-Tzung Cheng 編著 (2007) The Chrysomelidae of Taiwan, 1. 7) 大阪府 (2012) 平成24年度 病害虫発生予察特殊報第1号. 8) 尾園暁 (2014) ハムシハンドブック. 9) Sultan, A., L. Borowiec, M. A. Rafi, M. Ilyas, F. Naz and A. Shehzad (2008) Genus, 19(1): 93-102. 10) 東京都 (2004) 平成16年度 病害虫発生予察情報特殊報第1号. 11) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大辞典.
27	節足動物	*Earias vittella*	クサオビリンガ	チョウ目 (Lepidoptera)	ヤガ科 (Noctuidae)	インド、インドネシア、カンボジア、北朝鮮、シンガポール、スリランカ、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、日本（九州、沖縄県）、キスタン、バングラデシュ、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオス、アフガニスタン、イラン、サウジアラビア、セーシェル、オーストラリア、北マリアナ諸島、グアム、ソロモン、トンガ、パプアニューギニア、パラオ、フィジー	エノキアオイ、オクラ、トマト、トロロアオイ、アブーチロン属、フヨウ属、ワタ属	卵の大きさは直径約0.5mmの球状、幼虫の体長は13～18mm、成虫の体長は約12mm、開張は20～22mm。成虫が数百の卵を産卵。老齢幼虫は植物体上、果実上や莢壁と小苞葉の間で繭を作る。オクラでは穿孔により莢の変形や種子の損傷で収量や品質・市場価値が低下する。茎頂部から食入し、次いで蕾や果実を加害する。オクラでは、3週齢幼虫が茎へ食入することが確認されている。食入で頂部の葉が枯死し、植物全体が垂下する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。このため、本種により新たな被害が発生するおそれはないと考えられることから、本種は非検疫有害動植物に該当する。	1) 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛 (1982) 日本産蛾類大図鑑. 2) Al-Mehmmady, Roqaya M. (2000) Research Bulletin:Research Center College of Agriculture, King Saud Univ, 96: 5-18. 3) Mohapatra, L. N. (2007) Indian Journal of Agricultural Research, 41(1): 63-66. 4) Mushtaq Ahmad and M Iqbal Arif (2009) Pest Management Science, 65(4): 433-493. 5) CABI (2016) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2016/9/21). 6) EPPO (2016) PQR - EPPO database on quarantine pests. (online). 7) 九州大学(2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/03/23). 8) 神保宇嗣 (2016) 日本産蛾類総目録. (online), (Accessed_2016/10/17). 9) Catalogue of life (2016) Catalogue of life. (online), (Accessed_2016/10/17). 10) 岸田泰則 (2011) 日本産蛾類標準図鑑II.
28	節足動物	*Liriomyza trifolii*	マメハモグリバエ	ハエ目 (Diptera)	ハモグリバエ科 (Agromyzidae)	汎世界的に発生 （日本は東北以南）	セロリー、トマト、キュウリ等、27科116種の植物	卵の大きさは、長さ0.2～0.3mm、幅0.1～0.15mmで、白色から半透明。成虫の体長は、1.0～1.3mm、翅長は1.3～1.7mm。 雌は、摂食と産卵のため産卵管で葉を穿刺し穴を開ける。幼虫は、葉の内部を食害する。食害痕は、黒色と茶色を伴った白色で、産卵後3～4日で顕著になる。食害痕により光合成が低下し、被害が大きいと早期落葉や、果実の日焼けが起こる。温暖環境下では、通常1世代21～28日間。熱帯気候では周年発生し得る。卵から成虫まで25℃下で約19日。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・　薬剤散布（マメハモグリバエ又はハモグリバエ類で登録農薬がある。殺虫剤が一般的に使用されるが、薬剤抵抗性が大きな問題となる。） ・　天敵の導入（寄生蜂（コマユバチ科等）、昆虫寄生性線虫（*Steinernema* 属）） ・　ほ場の管理（寄主となる植物の除草、作物残渣のすき込み）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) Bueno, A. F., B. Zechmann, W. W. Hoback, R. C. O. F. Bueno and O. A. Fernandes (2007) Ciência Rural, Santa Maria, 37-6: 1510-1517. 2) CABI (2016) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2016/04/01). 3) CALIFORNIA AGRICULTURE, NOVEMBER-DECEMBER 1982 (1982) Control of Liriomyza trifolii with biological agents and insect growth regulators, 1982. 4) Department for Environment, Food and Rural Affairs (2007) Liriomyza leaf miners. Liriomyza leaf miners. (online). 5) EPPO Data Sheets. 6) Liu, T. X., L. Kang, K. M. Heinz and J. Trumble (2009) Biological control of Liriomyza leafminers: progress and perspective. Perspectives in Agriculture, Veterinary Science, Nutrition and Natural Resources 4: No. 4-No.4.. (online). 7) Murphy, S.T. and J. LaSalle (1999) Biocontrol News and Information, 1999(Vol20 No.3): 91-104. 8) 中野昭雄 (2005) 徳島農研報, 2: 13-21. 9) 西東力・大石剛裕・池田二三高・沢木忠雄 (1992) 本応用動物昆虫学会誌, 36: 183-191. 10) 西東力・大石剛裕・小澤朗人・池田二三高 (1995)日本応用動物昆虫学会誌, 39: 127-134. 11) Sher, R. B., M. P. Parrella and H. K. Kaya (2000) Biological Control, 17: 155-163. 12) 末永博・石田和英・田中章 (1995) 日本応用動物昆虫学会誌, 39: 245-251. 13) 田中寛・吉川和伸・杉本毅・高浦裕司・柴尾学 (2000) 日本応用動物昆虫学会誌, 44: 225-228. 14) UNIVERSITY of FLORIDA IFAS Extension (2001) American Serpentine Leafminer, *Liriomyza trifolii* (Burgess) (Insecta: Diptera: Agromyzidae). American Serpentine Leafminer, *Liriomyza trifolii* (Burgess) (Insecta: Diptera: Agromyzidae). (online).

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
29	節足動物	*Phyllotreta striolata*	キスジノミハムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ハムシ科 (Chrysomelidae)	インド、インドネシア、北朝鮮、シンガポール、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、日本、ネパール、ブータン、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、モンゴル、ラオス、アイルランド、アルバニア、イタリア、英国（グレート・ブリテン及び北アイルランドに限る。）、エストニア、オーストリア、オランダ、旧セルビア・モンテネグロ、旧ユーゴスラビア、ギリシャ、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、フランス、ブルガリア、ベラルーシ、ベルギー、ポーランド、北マケドニア共和国、ルクセンブルク、ロシア、南アフリカ共和国、アメリカ合衆国、カナダ	ナス、テンサイ、タバコ属、アブラナ科、フウチョウソウ科、ノウゼンハレン科	成虫の体長は2.12～2.18mm。終齢幼虫は、約3.8mmである。 成虫で落葉の下、土塊の間隙、草の根元、収穫されなかった野菜の葉の間などで越冬する。日本では、年間約3～5回世代発生。幼虫は根を食害する。成虫は、生長点、葉、花、根や莢などを食害する。葉には約1mmの丸い穴の食害痕を形成。幼苗期に被害が激しいと枯死することもある。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（キスジノミハムシで登録農薬がある。） ・ 長繊維不織布のべたがけ ・ 熱水土壌消毒 ・ 生物農薬の導入（昆虫寄生性線虫、真正細菌） ・ 除草	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) 岸国平 編 (1982) 新版　野菜の病害虫—診断と防除—: 537-540. 2) 村井智子・石谷正博 (1993) 北日本病虫研報44: 148-150. 3) 石川順也・廣瀬敏晴・藤富正昭 (2002) 日本応用動物昆虫学会大会講演要旨. 4) CABI (2012) Phyllotreta striolata (cabbage flea beetle) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2012/09/21). 5) 栃原比呂志 (1968) ダイコンひだ葉モザイクウイルス 日本植物病理学会報.34: 129-136. 6) Agriculture and Agri-Food Canada (2013) Agriculture and Agri-Food Canada, Saskatoon Research Centre, 107 Science Place, Saskatoon,Saskatchewan S7N 0X2, Canada. 7) Rick E. Foster and John L. Obermeyer, Extension Entomologists (2016) Vegetable Insects. (online), (Updated_2016/03/).
30	節足動物	*Etiella zinckenella*	シロイチモンジマダラメイガ	チョウ目 (Lepidoptera)	メイガ科 (Pyralidae)	汎世界的に発生（日本を含む。）	エンドウ、ダイズを含むマメ科42種類の植物	卵は楕円形で長さ0.6mm。幼虫は5齢まであり、終齢幼虫の体長は約15mm。成虫は開張24～27mmである。 年平均気温が14℃以上の地帯に発生が多く、年3～5世代。 卵は、若い莢、がく、葉柄に産卵される。幼虫は、マメ科作物の害虫で莢内に食入するが、莢は食害せず、子実を食害しながら成長する。 充分成長した幼虫は脱出して地表近くの物陰などでごみや土粒などをつづって繭をつくり、その中で蛹化し、越冬する。 成虫は長距離飛行もできると考えられている。エンドウ、ダイズ等の大害虫である。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（シロイチモンジマダラメイガで登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2012) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2012/09/04). 2) 江崎 悌三・一色周知・六浦晃・井上寛・岡垣弘・緒方正美・黒子浩 (1957) 原色日本蛾類図鑑（上）. 3) 井上寛・岡野磨瑳朗・白水隆・杉繁朗・山本英穂 (1964) 原色昆虫大圖鑑. 4) 神保宇嗣・ニワカガマニア・蛾LOVE (2017) みんなで作る日本産蛾類図鑑. (online), (Accessed_2017/02/08). 5) 神保宇嗣 (2017) Etiella zinckenella List-MJ 日本産蛾類総目録. (online), (Accessed_2017/02/08). 6) 持田作 (2003) 日本農業害虫大事典. 7) 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則　編 (2013) 日本産蛾類標準図鑑. 8) 農文協 編 (1991) 新版　原色作物の病害虫診断. 9) Tabata, J. and Yasuda, K. (2011) Japan Agricultural Research Quarterly; 2011.45(1):47-50. 10) 矢田脩 監修 (2007) 新訂 原色昆虫大圖鑑.
31	節足動物	*Otiorhynchus sulcatus*	キンケクチブトゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	日本（北海道を除く本州の関東以西）、マレーシア、アイルランド、アゾレス諸島（ポルトガル）、イタリア、ウクライナ、英国（グレート・ブリテン及び北アイルランドに限る。）、エストニア、オーストリア、オランダ、旧セルビア・モンテネグロ、クロアチア、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、セルビア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、フランス、ブルガリア、ベラルーシ、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、マルタ、ルクセンブルク、ロシア、エジプト、セントヘレナ、マデイラ諸島、アメリカ合衆国、アラスカ、カナダ、チリ、オーストラリア、タスマニア、ニュージーランド、ハワイ諸島	ブドウ、イチゴ、シロツメクサ, ナズナ他29科70種類	卵はほぼ円筒形で長さ1mm程度、幼虫は体長9～10.5mm、成虫は体長7～11mmである。単為生殖を行う。年1化性であるが、異なる態が同時に存在する。 幼虫は、深さ15～25cmの土中で越冬する。若齢幼虫は細い根を好んで食害し、成長した幼虫は大きな根を食害する。幼虫が高密度に発生した場合、植物が全滅することもある。 成虫は夜間に活動して、葉、茎、花等の地上部を加害する。成虫は後翅が退化して飛翔しない。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（キンケクチブトゾウムシで登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2016) Crop Protection Compendium. (online), (Accessed_2016/03/22). 2) EPPO (2015) EPPO PQR. 3) 真﨑誠 (2000) 植物防疫所調査研究報告, 36: 27-32. 4) Moorhouse ER, Charnley AK, Gillespie AT (1992) Annals of Applied Biology, 121(2): 431-454. 5) Morris, M.G. (1997) Handbooks for the Identification of British Insects Vol. 5, Part 17a :Broad-nosed weevils. Coleoptera: Curculionidae (Entiminae), 5: 14-23. 6) Ochs, V. G. (1960) Zeitschrift fürAngewandte Zoologie: 485-491. 7) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
32	節足動物	*Diachus auratus*	ヒロヒゲツツハムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ハムシ科 (Chrysomelidae)	日本（沖縄本島、宮古島）、フィリピン、北米、南米、オーストラリア、ニューカレドニア、バヌアツ、パプアニューギニア、ハワイ諸島、フィジー、フランス領ポリネシア	イチゴ, ダイズ等18科62種類	卵は長さ0.7mm、幅0.4mm。成虫は体長1.4-2.0mm。 幼虫、成虫が生葉を摂食する。成虫は摂食時、葉の縁や葉の表面に小孔を開ける。成虫は、産卵した卵を排泄物で覆って産みつける。1週間に30個産卵する。成虫は飛翔する。 南太平洋では豆類の害虫であり、米国ユタ州のイチゴほ場では本種により深刻な被害があり、地上部、特に果実が被害を受けた。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) Miller, S. E. and W. S. Davis (1985) Psyche, 92: 547-555. 2) 尾園 暁 (2014) ハムシハンドブック. 3) Riley, E. G., S. M. Clark, R. W. Flowers and A. J. Gilbert (2002) J. Agric. Entomol., 5(4): 267-287. 4) Schöller, M. (2009) Linzer biol. Beitr., 41(1): 767-801. 5) Starr, F., K. Starr, L. Loope (2006) Bishop Museum Occasional Papers, 88: 50. 6) Swezey, O. H. (1915) Proceedings of the Hawaiian Entomological Society, 3(2): 62-64. 7) Ward, C. R., C. W. O'Brien, L. B. O'Brien, D. E. Foster, and E. W. Huddleston (1977) U.S. Dep. Agric. Tech. Bull., 1557: 18-18. 8) Williams, C. E. (1988) The Great Lakes Entomologist, 21(3): 127-128. 9) Wood, S. L. and G. F. Knowlton (1949) Journal of Economic Entomology, 42(6): 989.
33	節足動物	*Agrotis ipsilon*	タマナヤガ	チョウ目 (Lepidoptera)	ヤガ科 (Noctuidae)	汎世界的に発生（日本を含む。）	広食性（33科97属の植物に寄生）	卵は約0.45mm。幼虫は、6又は7齢まであり、終齢幼虫の体長は、35～50mmとなる。成虫の開張は35～50mm。 卵は3-6日間、幼虫は20-35日間（気温に影響）、蛹は約16日間。1世代は約35-60日間である。幼虫の成長は気温に大きく影響を受け、中齢以降は光を避け土に潜る。夜間に地表に現れ、土壌表面付近の植物の茎をかみ切る。 本種は、非休眠性で、寒冷地では越冬できないとされる。成虫は季節により移動し、春に北へ、秋に南へ移動する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（タマナヤガで登録農薬がある。） ・ 幼虫に対する昆虫病原性線虫の利用 ・ 除草 ・ 網やカバーによる侵入防止	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) 小泉憲治・清久正夫 (1959) 岡山大学農学部学術報告, 14: 7-18. 2) 布施寛・斎藤真弼・石黒清秀・斎藤敏一 (1981) 北日本病虫研報, 32: 16-18. 3) 江崎悌三・一色周知・六浦晃・井上寛・岡垣弘・緒方正美・黒子浩 (1999) 原色日本蛾類図鑑. 4) 梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典. 5) J. L. Capinera (2001) Handbook of Vegetable Pests: Agrotis ipsilon: 383-386. 6) John, T. (2009) BLACK CUTWORM.
34	節足動物	*Delia platura*	タネバエ	ハエ目 (Diptera)	ハナバエ科 (Anthomyiidae)	汎世界的に発生（日本（沖縄を除く）を含む。）	イネ科、マメ科、ウリ科等15科の草本植物を中心に寄生	卵の大きさは、1～2mm、終齢幼虫は10mm以下、成虫は、翅の長さが5.2mm以下の小さなハエである。 本種は作物残渣、腐敗中の肥料などに誘引され、有機物近くの土壌表面に通常単独～最大10個程度の塊で産卵する。幼虫は土壌中6～8cmの深さまで潜り、播種された種子やその芽、幼苗の根・茎・地際部などに食入することがあり、不発芽、生育遅延、枯死、奇形症状などを起こす。土中や摂食場所で蛹化し、成虫は花を摂食する。生育適温は21～23℃。 夏季は幼虫態で、冬季は蛹態で休眠し、通常年2～4世代。 本種の広域分布は風による自然分散の可能性が示唆されている。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（タネバエで登録農薬がある。） ・ 栽植時期の調整 ・ 抵抗性の強い品種の使用 ・ 発生調査（モニタリング用のトラップに揮発性物資や粘着トラップが用いられる。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/01/20). 2) Capinera, J., L. (2008) Encyclopedia of Entomology: 3336-3339,3853-3885. 3) Frutchey, C. W. (1936) Michigan State University Agricutural Experiment Station Technical Bulletin, 152: 1-25. 4) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典.
35	節足動物	*Etiella behrii*	ヒメイチモジマダラメイガ	チョウ目 (Lepidoptera)	メイガ科 (Pyralidae)	インドネシア、台湾、中華人民共和国、日本（北海道・山形・群馬・熊本・鹿児島・石垣島・徳之島）、ブルネイ、マレーシア、オーストラリア、バヌアツ、パプアニューギニア	アルファルファ、エンドウ、ダイズ、ヒラマメ、ラッカセイ等のマメ科植物	成虫の開張は、約10mm。 雌成虫は、子嚢や花に産卵する。卵は、4～7日で孵化する。幼虫は5齢まであり、ふ化した幼虫が未熟な莢に潜り、24時間以内に摂食し始める。卵～成虫までの期間は4週間。 年間の世代数は、2～3回。飛翔距離は通常1～2m。 南オーストラリアでは、散発的だがレンズマメの重要な害虫とされている。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（メイガ類で登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) 神保宇嗣 (2008) 日本産蛾類総目録. 2) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/12/12). 3) OzAnimals (2016) Lucerne Seed Web Moth. (online), (Accessed_2016/04/04). 4) Sardi (2017) SARDI. (online), (Accessed_2017/01/31). 5) 安田耕司 (1997) 日本応用動物昆虫学会大会講演要旨, 41: 48-48.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
36	節足動物	*Thysanoplusia orichalcea*	ネッタイキクキンウワバ	チョウ目 (Lepidoptera)	ヤガ科 (Noctuidae)	インド、インドネシア、台湾、中華人民共和国、日本（沖縄島、西表島）、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、アイルランド、イタリア、英国（グレート・ブリテン及び北アイルランドに限る。）、旧ユーゴスラビア、スイス、スペイン、ドイツ、フランス、ベルギー、ポーランド、北マケドニア共和国、マルタ、ロシア、アルジェリア、アンゴラ、ウガンダ、エジプト, エチオピア、ガーナ、ケニア、コモロ、コンゴ共和国、ザンビア、ジンバブエ、スーダン、エスワティニ、セントヘレナ、ソマリア、タンザニア、ナイジェリア、ボツワナ、マラウイ、南アフリカ共和国、モザンビーク、モロッコ、レソト、レユニオン、オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニア	セリ科、ナス科、アブラナ科の野菜類を中心に38種類の植物に寄生。	卵は直径約0.6mmの、若齢幼虫は、体長約2mm。成虫の開張は約35mm。 卵は葉裏や茎に産み付けられ、3－4日後ふ化する。幼虫は、6齢まである。卵～成虫までの期間は24－35日。幼虫が葉の葉脈間の組織全体を摂食するため収量低下を招く。葉を折り曲げ、間に白い繭を作り蛹化する。蛹期間は約2～3週間。 本種は多化性の種で、アフリカでは雨季に2化、乾季に数化発生する。 沖縄本島南東部に隣接する津堅島のニンジン畑では葉が全て食害されるなど大きな被害がみられた。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（ウワバ類で登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) Bailey, P. T. Pests of Field Crops and Pastures: Identification and Control. Bailey, P. T.: 251-253. 2) CABI (2016) Crop Protection Compendium. (online), (Accessed_2016/03/25). 3) 岸田泰則 編 (2011) 日本産蛾類標準図鑑. 4) 野村昌史・上原さとみ・安藤　哲・島田玲子・猪俣伸一・宮竹貴久・ 江藤奈穂子 (1997) 日本応用動物昆虫学会大会講演要旨, 41: 200-200. 5) 野村昌史・鈴木寿信・広吉　聡・新垣則雄・安田慶次 (1999) 日本応用動物昆虫学会大会講演要旨 (43), 48, 43: 48-48.
37	節足動物	*Horridipamera nietneri*	モンクロナガカメムシ	カメムシ目 (Hemiptera)	ナガカメムシ科 (Lygaeidae)	インド、インドネシア、カンボジア、シンガポール、スリランカ、タイ、韓国、台湾、中華人民共和国、日本（九州、南西諸島）フィリピン、マレーシア、ミャンマー、ラオス、オーストラリア、サモア、トンガ、ニューカレドニア、フィジー、バヌアツ、パプアニューギニア、パラオ、マーシャル、ミクロネシア連邦	イネ	成虫の体長は5.3～6.4mmで、前胸背は通常一様に黒褐色で平伏した軟毛の他に直立する長毛を密生する。前翅は黒褐色で前縁が黄褐色、革質部の内角近くに小黄斑がある。 本種はイネを加害する。インドのガンジャム地区では乾季及び雨季に加害し、雨季の被害率は1.06～4.65%で、乾季の被害率は0.84～2.28%である。卵～5齢幼虫までの発育期間は42～55日（冬世代は88～103日）である。本種に加害されると斑点米となる。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) Gupta, S. P., Prakash, A., Rao, Jagadiswar., & Guapta, A. (1993) Indian Journal of Entomology, 55(3): 229-236. 2) 九州大学 (2016) 昆虫学文献データベース(KONCHUR). (online), (Accessed_2016/05/18). 3) M. B. Malipatil (1978) Australian Journal of Zoology, 56: 1-178. 4) Malipatil, M. B. (1979) Australisan Journal of Zoology, 27: 231-241. 5) 友国雅章 (1989) カメムシ型類 国立科学博物館専報, 22: 185-195. 6) 友国雅章　監修 (1993) 日本原色カメムシ図鑑.
38	節足動物	*Diocalandra frumenti*	ヨツボシヤシコクゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	オサゾウムシ科 (Dryophthoridae)	インド、インドネシア、シンガポール、スリランカ、タイ、台湾、中華人民共和国、日本、バングラデシュ、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、オランダ、スペイン、カナリア諸島、セーシェル、ソマリア、タンザニア、東アフリカ、マダガスカル、エクアドル、オーストラリア、ココス諸島、グアム、サモア、ソロモン、バヌアツ、パプアニューギニア、パラオ、ミクロネシア連邦	カナリーヤシ、ギネヤアブラヤシ、キューバダイオウヤシ、ケンチャヤシ、ココヤシ、シンノウヤシ、ソテツジュロ、ナツメヤシ、ユスラヤシ、ヒメタケヤシ属（Dypsis lutescens）、Hyophorbe verschaffeltii	成虫の体長は、6～8mm。 幼虫は根、花、果実及び葉を加害し、坑道を作る。通常、坑道の入り口には粘着性の排泄物を確認することができる。典型的な症状は葉の黄化及び白化である。また、二次的に糸状菌の成長を誘発する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（ゾウムシ類で登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) EPPO (1996) EPPO Global Database. (online), (Updated_1996/10/16). 2) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/01/20). 3) Morimoto, K (1985) Esakia, 35(1): 28-44. 4) Spirit of Fuerteventura (2016) Spirit of Fuerteventura. (online), (Accessed_2016/11/10).
39	節足動物	*Sitona hispidulus*	ケチビコフキゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	大韓民国、台湾、日本（北海道、本州、九州）、中東、アイルランド、アルバニア、イタリア、ウクライナ、英国（グレート・ブリテン及び北アイルランドに限る。）、エストニア、オーストリア、オランダ、キプロス、旧ユーゴスラビア、ギリシャ、クロアチア、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、スロベニア、セルビア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、フランス、ブルガリア、ベラルーシ、ベルギー、ポーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ポルトガル、北マケドニア共和国、モルドバ、モンテネグロ、ラトビア、リトアニア、リヒテンシュタイン、ルーマニア、ルクセンブルク、ロシア、北アフリカ、北米	ダイズ, アルファルファ等マメ科19種類	終齢幼虫は5-6.4mm。成虫は3.3-4.7 mm。 幼虫は葉及び根を食害し、根茎付近の土壌内に部屋を作って蛹化する。成虫は葉、茎、花、芽を食害する。蛹を除く各態で、牧草の根際の土中で越冬する。 卵期間は20日程度、幼虫期間は40日程度、蛹期間は10日程度である。日本では年1世代、アメリカでは年2世代発生する。 本種の加害を受けた葉は、縁にU字型の食痕を生じる。若齢幼虫は、根の根粒を、終齢幼虫は、ひげ根、側根及び主根を食害する。加害された植物は萎縮し、高温時に枯れる。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（ゾウムシ類で登録農薬がある。） ・ 輪作 ・ ほ場の管理（適切な灌漑、肥料管理）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) 梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典. 2) EPPO (2015) PQR - EPPO. (online), (Updated_2015/9/28). 3) de Jong, Y. et al. (2016) FAUNA EUROPAEA. (online), (Accessed_2016/04/20). 4) 北海道 (2016) 北海道ブルーリスト2010. (online), (Accessed_2016/04/19). 5) CABI (2012) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2012/5/17). 6) Catalogue of Life (2016) Catalogue of Life. (online), (Accessed_2016/04/19). 7) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/04/18). 8) 内藤通孝 (2013) Journal of Sugiyama Jogakuen University. Humanities Social sciences Natural sciences, 44: 89-104. 9) Wenninger, E. J. and G. E. Shewmaker (2014) Idaho Forage Web Page.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
40	節足動物	*Catopsilia pomona*	ウスキシロチョウ	チョウ目 (Lepidoptera)	シロチョウ科 (Pieridae)	インド、インドネシア、カンボジア、シンガポール、スリランカ、タイ、台湾、中華人民共和国、日本（南西諸島）、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオス、マダガスカル、モーリシャス、オーストラリア、ソロモン、ニューカレドニア、バヌアツ、パプアニューギニア	インドシタン、エビスグサ、オオバセンナ、オオハブソウ、ジャワセンナ、タガヤサン、ディディモポトリア、ナンバンサイカチ、バウク、ハナセンナ、ハブソウ、バラン、モモイロナンバンサイカチ、ユソウボク、カワラケツメイ属（*Cassia alexandrina*、*C. appendiculata*、*C. australis*、*C. bakeriana*、*C. brewsteri*、*C. coroniloides*、*C. grrettiana*、*C. hebecarpa*、*C. magnifolia*、*C. marksiana*、*C. multijuga*、*C. nirobienisis*、*C. nirobiensis*、*C. odorata*、*C. pleurocarpa*、*C. queenslandica*、*C. roxburghii*、*C. surattensis*、*C. tomentella*、*C. venusta* ）、ツノクサネム属（*Sesbania javanica*、*S. roxburghii*）、ブテア属、ブラウネア属	終齢幼虫の体長は42mm、成虫の前翅長は33～37mm。 マメ科の樹木をおもな食樹とし、植林地から都市にいたるまでに広く生息する。 寄主植物の新芽・新葉に1個ずつ産卵される。幼虫は若葉、つぼみ・花を摂食する。全幼虫期を葉表で生活し、3齢頃からは葉縁から摂食するようになる。蛹化は寄主植物の葉裏や小枝等で行われる。 成虫は、銀紋型（pomona form)と無紋型（crocale form)の二型が存在し、移動性、越冬性、休眠性等の生態も異なる。 本種は著しい多型を示し、現在5亜種存在。なお、亜種間の食性の差の情報は得られなかった。名義タイプ亜種のssp. *pomona*（分布：日本、中国南部、インド、インドシナ半島、フィリピン、スンダランド（小スンダ列島を除く））の他、ssp. *micromalayana*（分布：小スンダ列島）、ssp. *dionysiades*（サンギ島）、ssp. flava（分布：セレベス島、セラヤール島、カラオ島）、及びssp. *rivalis*（分布：スラ諸島、モルッカ諸島～ニューギニア、ビスマーク諸島、ソロモン諸島、オーストラリア）がある。 なお、本種が日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない。	・ 薬剤散布（登録農薬はない。）	本種には5亜種が存在し、日本にはそのうちの1亜種（C. pomona pomona）が存在するが、亜種間に食性を含む生態的な差があるとの情報はない。そのため、新たな被害を発生するおそれがないと考えられるため、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もない。以上のことから、種として非検疫有害動植物に該当する。	1) Braby, M. (2000) Butterflies of Australia Their Identification, Biology and Distribution, Volume 1:Catopsilia pomona: 1004. 2) Common, I. F. B. and D. F. Waterhouse (1972) BUTTERFLIES OF AUSTRALIA : Catopsilia pomona :194-195. 3) Corbet, A. S. and H. M. Pendlebury (1992) The Butterflies of the Malay Peninsula 4th edn: Catopsilia pomona pomona: 96-98. 4) 福田晴夫 (2011) 昆虫と自然, 46(14): 7-11. 5) 福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋昭・高橋真弓・田中蕃・田中洋・若林守男・渡邉康之 (1985) 原色日本蝶類生態図鑑. 6) 本田計一 ・ 加藤義臣 (2005) チョウの生物学. 7) 五十嵐邁・福田晴夫 (1997) アジア産蝶類生活史図鑑Ⅰ. 8) 岩﨑郁雄・八木真紀子 (2011) 昆虫と自然, 46(14): 21-24. 9) 川副昭人・若林守男 (1978) 原色日本蝶類図鑑. 10) 熊谷信晴・伊東信雄 (2011)昆虫と自然, 46(14): 14-16. 11) 内藤孝道・今村哲夫 (1976)蝶と蛾, 27（3）: 119-123. 12) 二町一成 (2011) 昆虫と自然, 46(14): 25-29. 13) Parson, M. (1999) THE BUTTERFLIES OF PAPUA NEW GUINEA Their Systematic and Biology: Catopsilia pomona: 736. 14) Robinson, G. S., P. R. Ackery, I. J. Kitching, G. W. Beccaloni and L. M. Hernandez (2001) Hostplants of the moth and butterfly caterpillars of the Oriental Region: Catopsilia pomona: 97-98. 15) 田中洋 (2011) 昆虫と自然, 46(14): 17-20. 16) 矢田脩 (1981) 東南アジア島嶼の蝶: Catopsilia pomona: 262-263. 17) 矢田脩 (2011) 昆虫と自然, 46(14): 2-6. 18) Yata, O. and H. Tanaka (1979) 蝶と蛾 30(1,2): 97-106.
41	節足動物	*Corythucha marmorata*	アワダチソウグンバイ	カメムシ目 (Hemiptera)	グンバイムシ科 (Tingidae)	日本（福島、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、新潟、山梨、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、高知、佐賀、熊本 ）、アメリカ合衆国、カナダ、メキシコ、ジャマイカ	ナス、キク科（クワモドキ、ニガヨモギ、ヨモギ、コセンダングサ、ヒマワリ、キクイモ、セイタカアワダチソウ、オオオナモミ等30種類）、ヒルガオ科（サツマイモ等3種類）	成虫の体長は約3mm。卵は、縦0.5mm横0.25mm。 4月中旬からセイタカアワダチソウで第1世代の幼虫が発生する。5月下旬以降の第1世代成虫が農作物に飛来して加害する。成虫、幼虫とも葉裏に寄生し、特に幼虫は集団で吸汁加害する。葉に吸汁による白斑症状が現れる。また、排泄物により茎葉に汚れやすす病が発生し、加害が進行すると葉が黄化し、枯死する。 飛翔による自然分散と自動車への付着による人為的分散の相互作用で急速に拡大した。群生した草地及び近辺の植物残渣上で成虫で越冬する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（アワダチソウグンバイで登録農薬がある。） ・ 発生源となるキク科雑草の除去	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2011) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2011/03/26). 2) Drake, Carl J., and Ruhoff, Florence A. (1965) A Catalog (Hemiptera: Tingidae): 153-154. 3) EPPO (2016) EPPO-PQR. (online), (Accessed_2016/04/22). 4) 石川忠・高井幹夫・安永智秀 編 (2012) 日本原色カメムシ図鑑. 5) Kato, A., and N. Ohbayashi (2009) Entomological Science, 12: 130-134. 6) 長野県 (2008) 病害虫発生予察特殊報第4号. 7) 奈良県 (2005) 平成17年度病害虫発生予察特殊報第1号. 8) Schaefer, C. W and A. R. Panizzi (2000) CHAPTER4 Lace Bugs (Tigidae).: 85-137. 9) Wheeler A. G. Jr (1987) Proceedings of the Entomological Society of Washington, 89: 200.
42	節足動物	*Earias insulana*	ミスジアオリンガ	チョウ目 (Lepidoptera)	ヤガ科 (Noctuidae)	汎世界的に発生（日本（宮古島、石垣島）を含む。）	アブティロン・ヒブリヅム、イチビ、イネ、オクラ、ケブカワタ、サトウキビ、トウモロコシ、ワタ属, フヨウ属、ヤナギ科	卵は、ほぼ半球で直径0.5mm、終齢幼虫の体長は13～18mm。成虫は、体長約12mm、開張20～22mm。 雌は、花芽や蕾の表面に産卵する。産卵数は約150個。卵期は5～10日。幼虫は5齢まであり、8～25日で蛹化する。ワタの場合、1齢幼虫は末端の芽へと食入し、2齢幼虫以降は、蕾、花または新しい莢へと食入する。終齢幼虫は、白い繭を紡ぎ、植物に付着して蛹化する。蛹は9～15日、成虫は2～20日生存。生活史の長さは気温に左右され、幅広い気候に適応するが高い湿気には適応しない。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（ヨトウムシ類で登録農薬がある。多くの農薬に抵抗性がある。） ・ 収穫残留物のすき込み又は畑焼き	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/03/28). 2) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/01/). 3) EPPO (2015) PQR - EPPO. (online), (Updated_2015/09/28). 4) 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛 (1982) 日本産蛾類大図鑑. 5) 岸田泰則 (2011) 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ. 6) The Hebrew University of Jerusalem. (online).

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
43	節足動物	*Mudaria luteileprosa*	ドリアンモンヨトウ	チョウ目 (Lepidoptera)	ヤガ科 (Noctuidae)	インドネシア、タイ、ブルネイ、マレーシア	ドリアン	雄成虫は23mm、雌成虫は24～25mm。終齢幼虫の体長は約4cm。 卵は、幼果の棘に単体で産みつけられる。孵化幼虫は果皮上で摂食し、その後、果実内部に侵入する。幼虫は、種子内部に侵入して摂食し、糞をドリアンの果肉に放出する。幼虫は成長を終えるか果実が成熟して落果すると、直径5～8mmの穴をあけて果実から脱出し、湿った土の中で蛹化する。蛹は雨により活発化し、成虫になる。 防除しなかった場合の果実の損失は50%に及ぶ。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（登録農薬はない。） ・ 果実の袋掛け ・ 光トラップによる密度抑制 ・ 播種前の種子選別	本種はドリアンのみに寄生する。ドリアンは、日本で商業的に栽培されていない（農水省作物統計）。よって、まん延した場合に有用な植物に損害を与えるおそれがないと考えられるため、非検疫有害動植物に該当する。	1) Encyclopedia of Entomology (2008) Encyclopedia of Entomology 2nd Ed.: 3926-3940. 2) Australian Quarantine and Inspection Service (1999) Final Import Risk Analysis on the Importation of Fresh Durian Fruit (Durio zibethinus Murray) from the Kingdom of Thailand. (online). 3) IPM Thailand (2008) IPM Thailand. (online), (Updated_2008/03/14). 4) Pena et al. (2008) Biology.: 315-330. 5) Southendene Sdn. Bhd. (2016) The Moths of Borneo. (online), (Accessed_2016/12/30). 6) Sutrisno, H. (2005) Hayati, 12(3): 121-126.
44	節足動物	*Spodoptera pecten*	クシヒゲスジキリヨトウ	チョウ目 (Lepidoptera)	ヤガ科 (Noctuidae)	アジア（日本（小笠原諸島、南西諸島）を含む。）、アフリカ, オーストラリア, パプアニューギニア, ハワイ諸島	イネ、ギョウギシバ（バーミュダグラス）、セラヤ、ダイコン、トウモロコシ、サトウキビ属	成虫の開帳25-35mm。 幼虫は多くの草本植物の葉を食害する。日本国外ではサトウキビ、トウモロコシ、ダイコン、ギョウギシバを寄主植物とする記録がある。また、イネでは幼虫が葉を時折食害するとの報告がある。 土壌中で蛹化する。成虫は3～9月に出現する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・薬剤散布（ヨトウガで登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) CHATTERJEE, S. N. (1969) Indian Agricultural Research Institute, 35,B,No.1: 45-52. 2) EPPO (2016) EPPO PQR. (online), (Accessed_2016/10/25). 3) Inoue, H. (1965) 昆虫, 33(1): 131-141. 4) 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛 (1982) 日本産蛾類大図鑑. 5) Jack, H. W. (1923) Malayan Agricultural Journal, 11(6): 139-161. 6) 神保宇嗣・ニワカガマニア・蛾LOVE (2016) みんなで作る日本産蛾類図鑑. (online), (Accessed_2016/10/27). 7) 神保宇嗣 (2016) Spodoptera pecten. List-MJ 日本産蛾類総目録. 8) 岸田恭則 (2013) 日本産蛾類標準図鑑. 9) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/10/30). 10) MANDAL, D.K. and D. R. MAULIK (1991) FAUNA OF ORISSA.: 212-212. 11) Pathak, M. D. and Z. R. Khan (1994) INSECT PESTS OF RICE.: 65-65. 12) Southdene Sdn. Bhd. (2016) The Moths of Borneo. (online), (Accessed_2016/10/05). 13) The Barcode of Life Data System (2016) The Barcode of Life Data Systems. (online), (Accessed_2016/11/06). 14) Tsung, W. J. (1982) International Rice Research Newsletter, 7(2): 9-10. 15) United States Department of Agriculture (2005) New Pest Response Guidelines Spodoptera. (online).
45	節足動物	*Cosmobaris scolopacea*（=*Cosmobaris orientalis*）	マダラヒメゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	北朝鮮、大韓民国、中華人民共和国、日本（北海道を除く。）、イラン、シリア、トルコ、アルメニア、イタリア、ウクライナ、ウズベキスタン、英国（グレート・ブリテン及び北アイルランドに限る。）、オーストリア、オランダ、カザフスタン、ギリシャ、スイス、スペイン、スロバキア、タジキスタン、チェコ、トルクメニスタン、ハンガリー、フランス、ブルガリア、ポルトガル、ルーマニア、ロシア、エジプト、チュニジア、アメリカ合衆国、カナダ	アオゲイトウ、アカザ、アメリカアリタソウ、シロザ、ヨモギ、ハマアカザ属（*Atriplex halimus*、*A. thunbergifolia*、*Atriplex*（syn;*Halimione) portulacoides*）、フダンソウ属（*Beta cicla*、*B. vulgaris*）、ヨモギ属の一種（*Artemisia indica* var. *maximowiczii*）、ヒユ科	成虫の体長（口吻を除く）は3.0-3.7mm。 幼虫はヨモギの茎に虫えい瘻を作る。成虫は多数のヒユ科植物で見られる。卵は茎内に生みつけられ、幼虫は根の内部で越冬し、その中で蛹化する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) 馬場金太郎 (1957) 昆虫, 25: 57-57. 2) Catalogue of Life (2016) Catalogue of Life. (online)., (Accessed_2016/04/06, 2016/5/20) 3) 林匡夫・木元新作・森本桂 編 (1984) 原色日本甲虫図鑑. 4) Hong, K. J., S. Park and K. Han (2011) Insect Fauna of Korea Insect Fauna of Korea Volume 12, Number 2 Arthropoda: Insecta: Coleoptera: Curculionidae:Bagoninae, Baridinae, Ceutorhynchinae, Conoderinae,Cryptorhynchinae, Molytinae, Orobitidinae Weevils I Volume 12, Number 2. 5) 小島弘昭 (2016) 日本産ゾウムシデータベース. (online), (Accessed_2016/04/06). 6) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/04/06). 7) Löbl, I., and A. Smetana (2011) Catalogue of Palaearctic Coleoptera Volume 7: 373pp. 8) Morimoto K. and K. Yoshihara (1996) ESAKIA 36: 1-59. 9) Prena, J., J. Yang, L. Ren, Z. Wang, N. Liu and R. Zhang (2014) Zootaxa 3841 (3): 339-363.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
46	節足動物	*Stephanitis typica*	ゲットウグンバイ	カメムシ目 (Hemiptera)	グンバイムシ科 (Tingidae)	インド、インドネシア、北朝鮮、シンガポール、スリランカ、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、日本（四国、九州、南西諸島））、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、香港、マレーシア、ミャンマー、パプアニューギニア	インテゲル、ウコン、カルダモン、ギネヤアブラヤシ、クスノキ、ココヤシ、ショウガ、トゲバンレイシ、パラミツ、ミョウガ、ショウガ属の一種（*Zingiber kawagoii*）、サトイモ属、シュクシャ属、バショウ属、ハナミョウガ属	卵は長さ0.81-0.90mm直径0.45mm、成虫は体長3.5-4.5 mm。 卵は下位葉に産み付けられる。雌一匹が30～190個の卵を産み、ふ化までは約12日。若虫期間は平均10.41日。成虫の寿命は実験下において、雄で平均40日、雌で平均26日。 成虫及び若虫は主に下位葉の主脈周辺を吸汁し、加害された箇所には黄斑または白斑を生じる。上位葉が加害を受けると、食害部位の裏側に小白斑を生じる。加害の程度が大きくなると、植物の生長を妨げ、収量に悪影響を及ぼす。葉では変色、脱落、内部加害、壊死、しおれが生じる。 中国（広東省）では、バナナ葉上において複数世代が同時に確認されている。 なお、日本未発生病害（Root (wilt) Disease of Coconut (Phytoplasma))のベクターとなる報告があるが、当該菌はココヤシのみの病害であると考えられる。本種は、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（グンバイムシ類で登録農薬がある。） ・ 生物農薬の導入（*Stethoconus praefectus*）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、我が国未発生病原体（Root (wilt) Disease of Coconut (Phytoplasma))のベクターとなるが、当該菌はココヤシのみの病害であると考えられ、本病原体が我が国において経済的被害を及ぼす可能性は少ない。よって、新たな被害を発生するおそれがないと考える。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する	1) Aukema, B. and C. Rieger (1996) Stephanitis typica: 63. 2) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/01/20). 3) Distant, L. W. (1902) Cadamustus typicus: 132. 4) Drake, J. C. and A. F. Ruhoff (1965) Stephanitis typica: 364-365. 5) Ghosh, K. L. (2008) Handbook on HEMIPTERAN PESTS IN INDIA 6) 石川忠・高井幹夫・安永智秀 編 (2012) 日本原色カメムシ図鑑. 7) Koshy, K. P. (1999) Root (wilt) disease of coconut Indian Phytopathology: 335-342. 8) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/04/04). 9) Mathen, K. (1985) Journal of Plantation Crops, 13(1): 56-59. 10) Takeya, C. (1963) Stephanitis typica: 39-40.
47	節足動物	*Blosyrus asellus*	カタビロカククチゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	インド、東アジア（日本（南西諸島）を含む。）、東南アジア、ハワイ諸島	サツマイモ	成虫の体長（口吻を含む。）は、6.5～7mm。 成虫はサツマイモの葉を食害する。葉の間に隠れ、震動などにより地面に落下して擬死状態（死んだふり）となり動かなくなる。成虫の茶色の体色は土壌に溶け込む。夜行性で日中は発見が困難である。幼虫は土壌と塊根の隙間で生活し、塊根の表面を食害する。塊根が掘り出されるまで、食害の有無は判別できない。成虫の葉の食害痕が生息の指標となる。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) 林 匡夫・森本 桂・木元　新作（1984）原色日本甲虫図鑑. 2) Heu, R. A., D. M. Tsuda, S. K. Fukuda, C. L. Young and M. I. Lee (2011) State of Hawaii Department of Agriculture New Pest Advisory No. 09-01. (online). 3) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/05/11). 4) Mahendiran, G. and V. V. Ramamurthy (2016) Journal of Threatened Taxa 5: 4682-4686. (online), (Accessed_2016/07/03).
48	節足動物	*Epitrix hirtipennis*	タバコノミハムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ハムシ科 (Chrysomelidae)	日本（関東地方の1都6県）、イタリア、ギリシャ、北米、中米、ハワイ諸島	タバコ, ナス, バレイショ等7科31種類の植物	卵は0.36-0.48mm、幼虫は初齢では1mm以下、終齢では約4.2mm、蛹は1.75mm、成虫は1.5～2.5mm。 寄主植物付近の地表・土壌中に産卵される。幼虫はナス科植物の地下部、特に細根を食害するが、太い根では剥皮または穴を開ける。土壌中で1～2日後に蛹化する。成虫は落葉等の植物残差の下や耕作地に隣接する樹木・雑草地で越冬する。成虫は葉を食害し、多数の穴を開ける。被害が激しい場合は、葉脈を残して完全に食害する。 関東地域では、5～6月、9～11月にそれぞれ成虫が確認されたが、生活史は不明。米国では、3～5世代発生するとの報告がある。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（ハムシ類で登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2016) Crop Protection Compendium. (online), (Accessed_2016/04/07). 2) Capinera, J. L. (2001) Handbook of VEGETABLE PESTS. 3) Catalogue of life (2016) Catalogue of life. (online), (Accessed_2016/04/11). 4) Deczynski, A. M. (2016) University of Delaware Library Institutional Repository. (online), (Accessed_2016/04/25). 5) 原田晴康・滝沢春雄 (2012) 日本応用動物昆虫学会誌, 56(3): 117-120. 6) OEPP/EPPO (2016) Pest Risk Analysis for Epitrix species damaging potato tubers Pest Risk Analysis for Epitrix species damaging potato tubers. (online), (Accessed_2016/04/26).
49	節足動物	*Phaedon brassicae*	ダイコンサルハムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ハムシ科 (Chrysomelidae)	東アジア（日本を含む。）、ベトナム、南アジア、イタリア	アブラナ科作物を含む6科27種類	卵は1～2mm、幼虫は最大で約7mm前後、成虫は3～5mm。 卵は、下葉に産卵される。成熟幼虫は下葉にいて、暗い環境では食餌が盛んである。土中で蛹となる。成虫は光を嫌い、日中は下葉にいる。 成虫は飛翔せず、歩行によって移動。また、成・幼虫とも、手で触れたり葉を動かすと落下する習性がある。 成虫も幼虫も共に葉を葉脈や葉柄を残して食害するので、幼作物は枯れたり、あるいは生育が著しく遅れる。また、生育が進んだ作物でも甚だしい食害を受けると生育が止まり萎凋する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（ダイコンサルハムシで登録農薬がある。） ・ 生物農薬の導入（*Bacillus thuringiensis*、*Steinernema carpocapsae*） ・ ほ場の管理（除草、植物残渣の除去、ネット掛け等）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) 東清二 編著 (1987) 沖縄昆虫野外観察図鑑. 2) 東清二 監修 (2002) 増補改訂　琉球列島産昆虫目録. 3) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/01/15). 4) EPPO (2006) 2006/129 First report of Phaedon brassicae in Italy. 6) EPPO (2010) Organisms previously included in the EPPO Alert List. 7) EPPO PQR (2015) EPPO PQR. (online), (Updated_2015/9/28). 8) 林匡夫・橋本桂・木元新作 編著 (1984) 原色日本甲虫図鑑(Ⅳ). 9) 堀切正俊・柳田良雄・脇門敏治 (1979) 九州病害虫研究会報.25: 102-104. 10) 岸國平 編 (1982) 新版 野菜の病害虫 -診断と防除-: 544-545. 11) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Updated_2016/2/17). 12) 松本英治・藤本伸 (2003) 香川県農業試験場研究報告, 56号: 51-56. 13) 森本桂 (2007) 新訂原色昆虫大圖鑑Ⅱ. 14) 沖縄県植物防疫協会 (2010) 農作物病害虫診断ハンドブック増補版. 15) 尾園暁 (2014) ハムシハンドブック. 16) 筒井喜代治 (1973) 改訂増補・第6版原色生態作物害虫図譜. 17) 梅谷 献二・岡田 利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典. 18) Wang, X. F. Xue, Y. Tan and C. Lei (2007) EUROPEAN JOURNAL OF ENTOMOLOGY, 104: 693-697.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
50	節足動物	*Psylliodes isatidis*	プシリオデス・イサティディス	コウチュウ目 (Coleoptera)	ハムシ科 (Chrysomelidae)	モンゴル、イラク、イラン、トルコ、アゼルバイジャン、アルバニア、アルメニア、イタリア、ウクライナ、ウズベキスタン、エストニア、オーストリア、カザフスタン、旧ユーゴスラビア、ギリシャ、ジョージア、クロアチア、コソボ、スイス、スペイン、スロバキア、セルビア、チェコ、ドイツ、ハンガリー、フランス、ブルガリア、ベルギー、ポーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ポルトガル、北マケドニア共和国、モンテネグロ、ラトビア、リトアニア、リヒテンシュタイン、ルーマニア、ルクセンブルク、ロシア	タイセイ属（*Isatis canescens*、*I. tinctoria*）	成虫の体長は2.5～3.4mm。 雌成虫は秋に寄主植物の根冠近くの土中に卵を産む。秋に一部がふ化するが、幼虫は早春にふ化して生育途中の芽を摂食する。成熟した幼虫は、土中で蛹化する。成虫は、5月中旬以降に羽化する。短い摂食期間の後、成虫は活動量が低くなり、摂食を停止したのち夏の終わりまで夏眠に入る。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は、発生国において、有用な植物を加害し、被害が発生しているような情報はない。よって、我が国にまん延した場合においても、有用な植物に損害を与えるおそれがないと考えられるため、非検疫有害動植物に該当する。	1) Angelini, F. (1987) Atti del museo civico di storia naturale di Trieste, 11/12: 5-84. 2) Aslan, E. G. and K. Alkan (2015) Turkish Journal of Zoology, 39: 488-493. 3) Aslan, I., B. Gruev and H. Özbek (1999) Turkish Journal of Zoology, 23: 373-414. 4) Aslan, B., A. Yılmaz, F. Bayram and E. G. Aslan (2015) Fresenius Environmental Bulletin, 24: 1932-1939. 5) Baviera, C. and M. Biondi (2015) Atti della Accademia Peloritana dei Pericolanti, 93(2): A2-A2-50. 6) Beenen, R. and J. Winkelman (1993) Nederlandse Faunistische Mededelingen, 5: 9-18. 7) Beenen, R., J. Winkelman, F. Nunen and O. Vorst (2009) Entomologische Berichten, 69(1): 9-12. 8) Bienkowski, A. O. (2004) Leaf-beetles (Coleoptera:Chrysomelidae) of the Eastern Europe New key to subfamilies,genera,and species: 125. 8) Borowiec, L., R. Ścibior and D. Kubisz (2011) International Journal of Invertebrate Taxonomy, 22(4): 579-608. 9) Cam, H. and T. Atay (2008) International Journal of Natural and Engineering Sciences, 2(3): 21-26. 10) Campobasso, G., E. Colonnelli and H. McNeel (2008) Fragmenta Entomologica, 40(1): 167-180. 11) Cortat, G., H. L. Hinz, E. Gerber, M. Cristofaro, C. Tronci, B. A. 12)Korotyaev and L. 12) Gültekin (2008) International Symposium on Biological Control of Weeds: 133-177. 13) Fauna Europaea (2016) Psylliodes isatidis. Fauna Europaea. (online), (Accessed_2016/08/16). 14) Gavrilović, B. and S. Ćurčić (2011) Acta Zoologica Bulgaria, 63(3): 231-244. 15) Gruev, B. (2005) ANIMALIA, 41: 23-46. 16) Gruev, B. (2006) Historia naturalis bulgarica, 17: 51-79. 17) Gruev, B. and M. Döberl (2005) Psylliodes isatidis: 153. 18) Gruev, B. and V. Tomov (1998) Psylliodes isatidis: 125. 19) Gruev, B. and V. Tomov (2007) Psylliodes isatidis.: 286-289. 20) Gus'kova, E. V. (2010) Entomofauna, 31(14): 169-228. 21) Hinz, H.L., L. Blair, C. Closca and E. Gerber (2012) Isatis tinctoria Annual Report 2011: 1-25. 22) I vinskis, P., A. Meržijevskij and J. Rimšaitė (2014)NEW AND RARE FOR LITHUANIA INSECT SPECIES, 26: 31-36. 23) Jolivet, P. and T.J. Hawkeswood (1995) Host-Plants of Chrysomelidae of the World: 188-189. 24) Lundberg, S. (2006) Entomologisk Tidskrift, 127(3): 101-111. 25) Muránsky, P. (1999) Folia faunistica Slovaca, 4: 121-128. 26) Özdikmen, H. (2012) Munis Entomology & Zoology, 7(1): 51-108. 27) Rozner, I., and G. Rozner (2014) Natura Somogyiensis, 24: 81-98. 28) Scibior, R. (2010) Species of the leaf beetle (Coleoptera: Chrysomelidae) rare in the Polish fauna collected in the Pieniny and Western Beskid Mountains Wiadomości Entomologiczne, 29: 124. 29) Silfverberg, H. (2007) Entomologica Fennica, 18: 82-101. 30) Tamutis, V., B. Tamutė and R. Ferenca (2011) ZooKeys, 121: 1-494. 31) Wanntorp, H-E. and F. Ødegaard (2005) Entomologisk Tidskrift, 126(4): 191-199. 32) Warchałowski, A. (2003) Chrysomelidae The leaf-beetles of Europe and the Mediterranean area: 540. 33) Warchałowski, A. (2010) The Palaearctic Chrysomelidae Identification keys, 2: 998.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
51	節足動物	*Dolichotetranychus floridanus*	パイナップルヒメハダニ	ダニ目 (Acarina)	ヒメハダニ科 (Tenuipalpidae)	インド、インドネシア、タイ、台湾、日本（沖縄県）、フィリピン、アフリカ、北米、中米、ブラジル、ホンジュラス、オーストラリア、ハワイ諸島	パイナップル、ビンロウジュ	体長は、雄成虫0.252～0.4mm、雌成虫0.3～0.37mm。 本種は様々な態でパイナップルの葉の基部、ビンロウジュ生果実の基部に寄生し、表皮組織を食害する。本種の加害により葉や果実の表皮組織に傷が生じる。生じた傷からは糸状菌や細菌のような植物病原体が侵入し、組織の腐敗を引き起こす。被害のひどい植物は、枯死することもある。若い植物が被害を受けやすい。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) Baker, E. W. and E. A. Pritchard (1956) HILGARDIA A journal of Agricultural Science Published by the California Agricultural Experiment Station, 24(13): 374-377. 2) CABI (2008) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2008/05/15). 3) EHARA, S (1966) JOURNAL OF THE FACULTY OF SCIENCE HOKKAIDO UNIVERSITY Series V I . ZOOLOGY, 16(1): 1-22. 4) 江原昭三・真梶徳純 編 (1996) 植物ダニ学. 5) EPPO (2016) EPPO-PQR. (online), (Accessed_2016/07/21). 6) Flechtmann, C. H. W. (1974) Proceedings of the 4th International Congress of Acarology: 185-187. 7) Prabheena, P. and N. Ramani (2015) Journal of Agricultural Technology, 11(4): 889-893. 8) Rohrbach, K. G. and D. Schmitt (2003) Diseases of tropical fruit crops: 443-464. 9) 梅谷献二 編 (2012) 外来害虫と移入天敵. 10) Wolfenbarger, D. O. (1952) SYSTOX, A SYSTEMIC INSECTICIDE FOR PINEAPPLE MITE CONTROL FLORIDA STATE HORTICULTURAL SOCIETY: 197-199.
52	節足動物	*Polyphagotarsonemus latus*	チャノホコリダニ	ダニ目 (Acarina)	ホコリダニ科 (Tarsonemidae)	インド、インドネシア、シンガポール、スリランカ、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、日本、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、イスラエル、イラン、オマーン、トルコ、イタリア、英国（グレート・ブリテン及び北アイルランドに限る。）、オランダ、旧ソビエト連邦、ギリシャ、スイス、スウェーデン、スペイン、セルビア、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フランス、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、モンテネグロ、ルーマニア、ウガンダ、エチオピア、カメルーン、ケニア、コートジボワール、スーダン、セネガル、タンザニア、チャド、中央アフリカ、ナイジェリア、ブルキナファソ、ブルンジ、ベナン、マリ、南アフリカ共和国、モーリシャス、モザンビーク、モロッコ、リベリア、レユニオン、アメリカ合衆国、カナダ、バミューダ諸島、アメリカ領バージン諸島、アルゼンチン、アンティル諸島、ガイアナ、キューバ、グアドループ、コスタリカ、コロンビア、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、ニカラグア、パナマ、プエルトリコ、ブラジル、ベネズエラ、ペルー、マルティニーク、オーストラリア、グアム、サモア、ソロモン、ニュージーランド、パプアニューギニア、ハワイ諸島、フィジー	トウガラシ等を含む50科109種	雌成虫の体長、約0.2mm。 野菜、花卉、果樹等、多くの植物で多発する。熱帯・亜熱帯では一年中繁殖し20～30世代発生することもある。施設栽培では冬季でも発生する。 葉裏、若い枝、果実、花柄、花に卵を生む。交尾していない雌成虫は単為生殖により全て雄の卵を産む。秋に棲息していた植物上で成虫で越冬し、植物が枯れても生き残る。*Bemisia tabaci*（タバココナジラミ）や*Bemisia argentifolii*（シルバーリーフコナジラミ）の跗節及び脛節にしがみついて植物から植物へ移動する。 本種寄生の激しい場合、寄主植物の生長が止まり枯死する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（チャノホコリダニで登録農薬がある。） ・ 熱湯処理（43～49℃、15分間浸漬） ・ 生物農薬の導入（捕食性のダニ、昆虫病原糸状菌） ・ 除草 ・ 抵抗性品種の利用	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2014) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2014/07/28). 2) Chakraborti, S. (2000) Pest Management and Economic Zoology, 8(1): 79-84. 3) Cross, J. V. and P. Bassett (1982) Plant Pathology, 31: 391-393. 4) 江原昭三 (1980) 日本ダニ類図鑑. 5) 江原昭三 (1993) 日本原色植物ダニ図鑑. 6) 江原昭三・後藤哲雄 編 (2009) 原色植物ダニ検索図鑑. 7) EPPO (2002) EPPO Global Database. (online), (Updated_2002/07/10). 8) 福岡県 (2016) 平成28年度病害虫・雑草防除の手引き. (online). 9) Gerson, U (1992) Experimental & Applied Acarology, 13: 168-178. 10) Higa, S. Y. and Namba, R. (1971) Proceedings of the Hawaiian Entomological Society, 21(1): 93-96. 11) 垣内加奈子, 広瀬拓也 (2014) 植物防疫, 68(8): 10-13. 12) 中込暉夫 (1983) 植物防疫, 37: 192-195. 13) 仲宗根福則・比嘉良次・長嶺将昭・金城美恵子 (1996) 九州病害虫研究会報.42: 122-124. 14) 静岡県植物防疫協会 (2001) 写真で見る農作物病害虫診断ガイドブック増補版: Polyphagotarsonemus latus: 105-362. 15) 東京都 (2016) 小笠原レモン栽培管理マニュアル. (online). 16) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典. 17) University of Florida (2016) Polyphagotarsonemus latus Featured Creatures. (online), (Updated_2016/05/). 18) 山口卓宏・岩元順二・後藤秀章・野島秀伸・尾松直志・鳥越博明・安田耕司・瀬戸口脩・林川修二 (2006) 九州病害虫研究会報.52: 60-65.
53	節足動物	*Evergestis forficalis*	ナノメイガ	チョウ目 (Lepidoptera)	ツトガ科 (Crambidae)	インド、中華人民共和国、日本、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ合衆国	アブラナ科（カブ、カリフラワー、キャベツ、セイヨウワサビ、ダイコン、ハクサイ、メキャベツ、*Brassica rapa* subsp. *Oleifera*）	老齢幼虫の体長は18～20mm、成虫は、前翅長12～15mm、開張23～30mm。 本種は年2回発生する。蛹もしくは蛹化前の状態で土壌中にて繭内で越冬するが凍結すると死亡する。雌は25～50個産卵する。 幼虫は寄主植物の芯まで食入することがあり、作物は糞や幼虫の食害痕で汚される。 アブラナ科植物を食害し、しばしば大被害をもたらす。欧州全体で年によってはオオモンシロチョウと同等の深刻な被害をもたらす。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（登録農薬はない。） ・ 生物農薬の導入（卵寄生蜂、昆虫寄生性線虫） ・ オオツメクサの間作	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2011) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2011/08/10). 2) Dover, J., W. (1985) Entomologist's Gazette, 36: 251-255. 3) 江崎悌三・ 六浦晃・ 一色周知・ 井上寛・ 緒方正美・ 岡垣弘 (1957) 原色日本蛾類大図鑑. 4) 井上寛・ 岡野磨磋朗・ 白水隆・ 林繁郎・ 山本英穂 (1959) 原色昆虫大図鑑. 5) McKinley, R. G. (1992)Evergestis forficalis: 122-122. 6) Rai, K. M., R. Joshi and B. P. Gupta (1986) PROGRESSIVE HOTICULTURE, 18: 157-162. 7) 筒井等・本間健平・後藤千枝・早川博文 (1987) 北日本病害虫研報, 38: 159-160. 8) 梅谷献二・ 岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
54	節足動物	*Clepsis rurinana*	ウスモンハマキ	チョウ目 (Lepidoptera)	ハマキガ科 (Tortricidae)	インド、大韓民国、中央アジア、中華人民共和国、日本（北海道、千島列島、本州、佐渡島、淡路島、九州）、ネパール、モンゴル、中東、ヨーロッパ	アメリカミズメ、セイヨウイチイ、ブナ、アカザ属、イラクサ属、カエデ属、ガマズミ属、カラマツ属、コナラ属、シャク属、スイカズラ属、セイヨウヒルガオ属、ソラマメ属、タカトウダイ属、ツリガネニンジン属の一種（*Adenophora latifolia*）、トウヒ属、バイカウツギ属の一種（*Philadelphus tenuifolius*）、バラ属、ハンノキ属、ヒマラヤスギ属、ヒルガオ属の一種（*Calystegia sepium* var. *americana*）、プリカリア属、ホトトギス属、モミ属、ユリ属、リンゴ属の一種（*Malus sibirica*）	開張は、雄成虫12～18mm、雌成虫16～22mm。成虫は6～8月に記録があり、年1～2化と推定される。幼虫は葉を巻いて食害する。中齢幼虫で冬眠する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・薬剤散布（ハマキガ類で登録農薬がある。）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) Catalogue of Life (2016) Catalogue of Life. (online), (Accessed_2016/06/10). 2) Danilevskii, A. S. (1989) Clepsis rurinana.: 123-124. 3) Fauna of Europaea (2016) Fauna of Europaea. (online), (Accessed_2016/06/10). 4) Kawabe, A. (2016) 昆蟲 33(4): 459-465. 5) Michaelis, H. N. (1981) Entomologist's Gazette, 32 (3): 192-192. 6) 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則 編 (2013) 日本産蛾類標準図鑑. 7) Natural History Museum (2016) (online), (Accessed_2016/08/16). 8) Park, K., B. Lee, Y. Bae, H. Han and B. Byun (2016) China Journal of Asia-Pacific Biodiversity 7(4): 355-363. (online), (Accessed_2016/06/13).

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
55	節足動物	*Autographa nigrisigna*	タマナギンウワバ	チョウ目 (Lepidoptera)	ヤガ科 (Noctuidae)	インド、タイ、大韓民国、朝鮮半島、中華人民共和国、日本（九州以北）、ネパール、パキスタン、ブータン、ベトナム、ミャンマー、モンゴル、ラオス、アフガニスタン、ロシア	広食性（14科43属の植物）	幼虫の体長は、約40mm。成虫は、体長約18mm、開張34～40mm。 雌は葉裏に一個ずつ点々と産卵する。若齢幼虫は寄主の中下位葉の裏側に生息し、葉を中心に果実、花を含む植物全体を外部から摂食する。寄生が多いときは落葉を引き起こす。成虫は日中、日没後に関わりなく活動し、摂食は主として訪花吸蜜である。高湿度条件下でよく増殖する。日本では多化性で、年間発生数は東北地方3回、関西以西4～5回、高冷地年1～2回と推定されている。 休眠性はないとされるが、寒・高冷地では成虫及び幼虫で、暖地では各態で越冬する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（タマナキンウワバ又はウワバ類で登録農薬がある。） ・ ベタ掛けシートや防虫ネットの被覆 ・ 昆虫病原性細菌（BT剤）の使用 ・ 総合防除の実施（品種の選択、施肥、除草方法、植付け時期の選択）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) CABI (2012) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2012/10/02). 2) EPPO (2002) EPPO Global Database. (online), (Updated_2002/11/17). 3) 江崎悌三・一色周知・六浦晃・井上寛・岡恒弘・緒方正美・黒子浩 (1958) 原色日本蛾類図鑑. 4) Hashiyama A, M. Nomura, J, Kurihara and G. Toyoshima (2011) Journal of Economic Entomology, 104 (4): 1280-1285. 5) 橋山葵・野村昌史・栗原潤・豊嶋悟郎 (2012) 食と緑の科学, 66: 11-16. 6) Hashiyama, A., M. Nomura, J. Kurihara and G. Toyoshima (2013) Journal of Economic Entomology, 106 (2): 690-694. 7) 平田貞雄 (1962) 日本応用動物昆虫学会誌, 6 (1): 8-14. 8) 一瀬太良 (1959) 日本応用動物昆虫学会誌, 3 (2): 99-106. 9) 一瀬太良 (1960) 日本応用動物昆虫学会誌, 4 (1): 26-30. 10) 一瀬太良 (1962) 東京農工大学農学部学術報告: 1-152. 11) 一瀬太良・渋谷 成美 (1959) 日本応用動物昆虫学会誌, 3: 157-163. 12) 井上寛・岡野磨瑳郎・白水隆・杉繁郎・山本英穂 (1959) 原色昆虫大圖鑑. 13) 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛 (1982) 日本産蛾類大図鑑. 14) 金子順一 (1996) 日本応用動物昆虫学会誌, 40 (4): 305-308. 15) 岸田泰則 (2011) 日本産蛾類標準図鑑. 16) 駒井古実・吉安裕・那須義次・斉藤寿久 (2011) Autographa nigrisigna: 897-898. 17) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/07/06). 17) 六浦晃・服部伊楚子・山本義丸・一色周知 (1965) 原色日本蛾類幼虫図鑑. 18) 日本応用動物昆虫学会 編 (2006) 農林有害動物･昆虫名鑑 増補改訂版. 19) 新国 忠、坂本 与市 (1967) 北日本病害虫研究会報, 18: 100. 20) Rizvi, S. M. A. and H. M. Singh (1980) International Chickpea Newsletter, 3: 15-16. 21) Ronkay, L. and G. Behounek (2008) Autographa nigrisigna, 1: 95-96. 22) Sekhon, C.K., Singh, J. (2015) International Journal of Applied Research, 1 (5): 175-181. 23) 関谷一郎・柳武 (1960) 日本応用動物昆虫学会誌, 4: 10-11. 24) 鈴木敏男 (1991) 北日本病害虫研究会報, 42: 136-140. 25) 梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典. 26) Yadav, S. S. and R. J. Redden (2007) Autographa nigrisigna: 530. 27) 山口県 (2016) 平成28年 山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準 主な病害虫の発生生態と防除対策資料（ウワバ類）. (online), (Accessed_2016/09/01).
56	節足動物	*Curculio sikkimensis*	クリシギゾウムシ	コウチュウ目 (Coleoptera)	ゾウムシ科 (Curculionidae)	インド、北朝鮮、大韓民国、中華人民共和国、日本（九州以北）、ロシア	クリ、アマグリ、クヌギ、シラカシ、コナラ、コナラ属の一種（*Quercus leucotrichophora*）	幼虫は、体長約12mm。雄成虫は体長約8mmで口吻長は約3.5mm。雌成虫は体長約10mmで口吻長は約8mm。 交尾後の雌成虫がクリの子実の渋皮に達する穴を開け、その部分に1果当たり通常2～8卵を産む。幼虫はクリの子実の内部にひそみ、果肉を食害し、老熟するまでの全期間を子実の中で過ごす。その間、排出した糞を子実の外に出さないので糞が発酵し、被害果は悪臭を発し、果肉は腐敗する。悪臭は子実全体に及び商品価値は全くなくなる。 通常は、年1世代。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（クリシギゾウムシで登録農薬がある。） ・ 子実の温湯浸漬処理（50℃30分） ・ ほ場の管理（落果果実の除去、冬季の耕起による土壌中の幼虫及び蛹の駆除）	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) Ajay Sharma; Verma, T. D. (2003) Indian Journal of Forestry, 26: 14-18. 2) CABI (2015) Curculio sikkimensis. Crop Protection Compendium <Online> (Updated_2015/05/15). 3) 檜垣 守男 (2006) 日本応用動物昆虫学会大会講演要旨. 4) 二井清友・廣瀬敏晴・西口真嗣・川島誠蔵 (2014) 植物防疫, 68(5): 1-5. 5) 神尾真司 (2014) 植物防疫, 68(5): 18-22. 6) 金崎秀司 (2014) 植物防疫, 68(5): 12-17. 7) 鹿島哲郎 (2014) 植物防疫, 68(10): 30-34. 8) 小林正秀 (2014) 植物防疫, 68(5): 6-11. 9) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/10/09). 10) 森本桂・中曽猛彦・大林一夫・野村鎮・黒沢良彦 (2007) 原色昆虫大圖鑑. 11) 梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
57	節足動物	*Emblethis vicarius*	エンブレシス・ヴィカリウス	カメムシ目 (Hemiptera)	ナガカメムシ科 (Lygaeidae)	アメリカ合衆国、カナダ、メキシコ、グアテマラ、中南米（西インド諸島を含む。）	シロザ	成虫の体長は6～7mm。 本種は種子を吸汁する。また、牛の糞を吸汁するとの報告もある。本種の生息地は過放牧の牧場、様々な牧草地、砂利採取場や駐車場、砂場、道路沿い、砂浜などの開けた砂地に限られる。 アメリカ合衆国ニューイングランド州南部では、本種は年二化性である。また、フロリダ南部では12月に成虫と若虫が得られたことから、温暖な地域では本種は年間を通じて繁殖し続ける可能性がある。 ニューイングランド南部では、本種は成虫で越冬する。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は、発生国において、有用な植物を加害し、被害が発生しているような情報はない。よって、我が国にまん延した場合においても、有用な植物に損害を与えるおそれがないと考えられるため、非検疫有害動植物に該当する。	1) Ashlock, D. (1958) Annals of the Entomological Society of America: 199-208. 2) Catalogue of Life (2016) Catalogue of life. (online). 3) Henry, T. J. and R. C. Froeschner (1988) Catalog of the Heteroptera, or true bugs, of Canada and the continental United States: 218-219. 4) Horvath, G. (1908) Annales historico-naturales Musei nationalis hungarici: 555-569. 5) Scudder, G. G. E. (1993) Memoirs of the Entomological Society of Canada, 125: 75-113. 6) Scudder, G. G. E. (1997) True bugs (Heteroptera) of the Yukon Insects of the Yukon: 241-336. 7) Scudder, G. G. E. (2014) Chapter 10 The Heteroptera (Hemiptera) of the Prairies Ecozone of Canada Arthropods of Canadian Grasslands, 3: 283-309. 8) Slater, J. A. (1964) A Catalogue of the Lygaeidae of the World: 1439-1440. 9) Slater, J. A. and J. E. O'Donnell (1995) A Catalogue of the Lygaeidae of the World (1960-1994): 186. 10) Slater, J. A. and R. M. Raranowski (1990) Lygaeidae of Florida (Hemiptera:Heteroptera) Arthropods of Florida and neighboring land areas, 14: 184-185.
58	節足動物	*Dacus persicus*	ダクス・ペルシクス	ハエ目 (Diptera)	ミバエ科 (Tephritidae)	インド、スリランカ、パキスタン、アラブ首長国連邦、イラク、イラン、オマーン	カロトロピス属（Calotropis gigantea, C. procera）	翅長は4.9～6.4mm。 本種は単食性、多化性のミバエと推測され、記録のある寄主植物はキョウチクトウ科の*C. procera* 及び*C. gigantea* の2種のみである。発達途中の莢に産卵し、幼虫が莢の中で摂食、発達し、その後莢から脱出して土中で蛹化する。本種が寄生した果実は腐敗し、成熟前に落果する。1世代に要する期間は約48日、1年あたり5～7世代が存在する。誘引物質は不明。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種は、発生国において、有用な植物を加害し、被害が発生しているような情報はない。よって、我が国にまん延した場合においても、有用な植物に損害を与えるおそれがないと考えられるため、非検疫有害動植物に該当する。	1) Belgian Biodiversity Information Facility (2016) True Fruit flies (Diptera, Tephritidae) of the Afrotropical Region. (online), (Updated_2016/11/10). 2) Dhileepan, K. (2014) Biocontrol Science and Technology, 24(9): 977-998. 3) Drew, R. A. I., Hancock, D. L. and White, I. M. (1998) Invertebrate Taxonomy, 12(4): 567-654. 4) Kapoor, V. C. (2005) Israel Journal of Entomology, 35-36: 459-475. 5) Catalogue of Life (2017) Catalogue of Life.(online), (Accessed_2017/02/14).
59	節足動物	*Arthisma scissuralis*	アルシスマ・スシッスラリス	チョウ目 (Lepidoptera)	ヤガ科 (Noctuidae)	インド、インドネシア、シンガポール、タイ、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、オーストラリア	ドリアン	開張約3cm。成虫の前翅は錆茶色で、末端はより暗色、前縁脈のそばに白斑がある。 タイでは7月と11月の年2回出現する。幼虫が葉を摂食する。マイナーな害虫。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	情報なし	本種はドリアンのみに寄生する。ドリアンは、日本で商業的に栽培されていない(農水省作物統計）。よって、まん延した場合に有用な植物に損害を与えるおそれがないと考えられるため、非検疫有害動植物に該当する。	1)Digby Gascoine (1999) FINAL IMPORT RISK ANALYSIS OF THE IMPORTATION OF FRESH DURIAN FRUIT(Durio zibethinus Murray) FROM THE KINGDOM OF THAILAND. (online). 2)Don Herbison-Evans and Stella Crossley (2010) courtesy of COFFS HARBOUR Butterfly House. (online), (Updated_2010/04/01). 3)Hiroshi Kuroko and Angoon Lewvanich (1993) Lepidopterous Pests of Tropical Fruit Trees in Thailand (with Thai Text).: 47-49 , Pl23. 4)Jeremy Daniel Holloway (2016) The Moths Of Boruneo. (online), (Accessed_2016/09/27). 5)Park,Kyu-Tek, Yang-Seop Bae, Nguyen Nhu Cuong, Pham Van Nha, & PhamThi Vuong (2007) Moths of North Vietnam.: 61,251.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
60	節足動物	*Euzophera batangensis*	クロフタモンマダラメイガ	チョウ目 (Lepidoptera)	メイガ科 (Pyralidae)	中華人民共和国、日本（沖縄県を除く）、ロシア、朝鮮半島	モモ、セイヨウスモモ、ブドウ、ナシ、ビワ、リンゴ、クリ、カキ、マサキ等	幼虫の体長は約13mm、成虫の体長は約15mmである。 広食性の害虫で、幼虫は木本類の葉、実、樹皮下の形成層などを食害する。樹木では幹部の樹皮と木質部の間を縦横に食害する。糞は糸で粗く綴られており、年中見られる。 年間を通じて3～4世代を繰り返す。第1世代と第2世代の幼虫は老熟すると加害部樹皮の割れ目付近に白色の絹糸の繭を作って蛹化する。越冬世代は繭の中に老熟幼虫で留まり、翌年4月上旬～下旬に蛹化する。越冬世代成虫は比較的そろって羽化するが、夏期には世代間で羽化時期が異なる場合が多く、世代の区切りは不明確である。 なお、日本未発生病害虫のベクターとなる、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（登録農薬はない。） ・ 冬季の粗皮削りによる密度抑制 ・ 幼虫及び蛹を捕殺 ・ 被害木伐採 ・ 密植の回避 ・ 生物農薬の導入（越冬世代幼虫に対する寄生蜂（ヒメキイロコウラコマユバチ））	本種は日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) 愛媛県 (2013) フタモンマダラメイガに関する情報. 話題の病害虫情報. (online), (Updated_2013/01/15). 2) 江崎梯三・一色周知・六浦晃・井上寛・岡垣弘・緒方正美・黒子浩著 (1957) 原色日本蛾類図鑑. 3) 藤岡伸祐 (2016) 農薬時代 <Online> 197: 26-30. 4) 藤田博之・林良考 (2015) 奈良県農業研究開発センター研究報告 46: 1-9. 5) Hoskovec M. et al. (2006) Talanta, 69(3): 542-547. 6) 神保宇嗣・ニワカガマニア・蛾LOVE (2016) みんなで作る日本産蛾類図鑑. (online), (Updated_2016/05/22). 7) 高知県 (2013) ニホンナシを加害するフタモンマダラメイガの発生推移と防除対策. (online). 8) 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則 編 (2013) 日本産蛾類標準図鑑. 9) 滋賀県 (2012) 平成24年度病害虫発生予察特殊報第1号. 10) 静岡県 (2011) 平成23年度病害虫発生予察特殊報第1号. 11) 杖田浩二・鈴木俊郎・妙楽崇 著 (2012) 関西病虫研報, 54: 181-183. 12) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典. 13) Wen XiuJun, Kalinova, B., Liu ManGuang, Hoskovec, M. (2009) Scientia Silvae Sinicae, 45(12): 83-89. 14) 矢田脩 監修 (2007) 新訂 原色昆虫大圖鑑. 15) 山口昭・大竹昭郎 編 (1986) 果樹の病害虫—診断と防除—. 16) 山口県 (2011) 平成23年度病害虫発生予察特殊報第1号.
61	節足動物	*Amrasca biguttula*	フタテンミドリヒメヨコバイ	カメムシ目 (Hemiptera)	ヨコバイ科 (Cicadellidae)	インド、インドネシア、クリスマス島、タイ、中華人民共和国、日本（本州、小笠原諸島、南西諸島）、台湾、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、ミャンマー、ラオス、アフガニスタン、ガーナ、モーリシャス、オーストラリア、グアム、マリアナ諸島	アフリカヒゲシバ、インゲンマメ、オクラ、キマメ、ササゲ、ダイコン、ダイズ、テンサイ、トウグワ、ナス、ヌグ、バレイショ、ヒマワリ、モロコシ、ラッカセイ、リクチメン、リョクトウ、ウリ科、カワラケツメイ属、キンセンカ属、ツナソ属、ヒユ属、フヨウ属、	体長は、終齢幼虫は2.4～3.2mm、成虫は2.7～3.2mm。 本種の雌成虫は一度の産卵で、15卵ほどを葉の主脈の内部に産み付ける。卵は黄白色であるが、ふ化直前には灰色がかった黄色になる。 本種の卵は4～11日でふ化する。幼虫期間は7～21日、成虫の寿命は35～50日であり、年間で7世代発生する。寄主における本種の成育時期は寄主植物の生育期間中を通じ、増殖し続ける。幼虫・成虫とも、新葉や茎から吸汁する。 なお、本種は国内未発生のナス属のBrinjal little leaf病の病原体である我が国未報告と考えられる2種のPhytoplasma (16SrⅡ-D group及び16SrⅥ-D）を媒介することが報告されている。本病は、激しい萎凋症状、節間のつまり、枝の叢生、小葉化及び花が葉化する症状を引き起こすことから、発生国では、重要な病害の一つとなっている。	・ 薬剤散布（ヨコバイ類で登録農薬がある。）	本種は国内未発生の病害（little leaf brinjal)の病原体である2種のPhytoplsmaを媒介するとの情報がある。一般にウイルス等の病原菌は栽培用の宿主植物を経路して侵入するおそれが高いと考えられていることから、栽植用植物に付着する本種は検疫措置の対象と判断される。 一方、消費用寄主植物に付着する本種については、本種が日本既発生であること、一般に消費物から他の作物に病原体を伝搬する可能性は極めて低いとされることから、検疫措置の必要は無いと判断される。 以上のことから、非検疫有害動植物（栽培の用に供する植物に付着するものを除く。）に該当する。	1) Bhatti, J. A., A. Suhail, M. A. Khan, and N. Javed (2015) Journal of Animal & Plant Sciences, 25(6): 1626-1632. 2) Bunwaree, A. G., N. Contaldo, S. Paltrinieri, and S. P. Benimadhu (2011) Bulletin of Insectology, 64: 103-104. 3) CABI (2016) Invasive Speceis Compendium. (online), (Accessed_2016/04/13). 4) EPPO (2016) EPPO-PQR. (online), (Accessed_2016/04/28). 5) Gangwar, R. K., and D. V. Singh (2014) Journal of Biology, Agriculture and Healthcare: 116-119. 6) Ghosh, L. K. (2008) Handbook on HEMIPTERAN PESTS IN INDIA. 7) 九州大学 (2016) 日本産昆虫目録データベース. (online), (Accessed_2016/04/22). 8) Mahmood, T., S. I. Hussain, K. M. Khokhar, G. Jeelani and M. Ahmad (2002) Asian Journal of Plant Sciences: 403-404. 9) Maketon, M., Coghlan, P, O., Hotaga, D. (2008) INTERNATIONAL JOURNAL OF AGRICULTURE & BIOLOGY. 10) 小野剛・小谷野伸二・野地喜徳・大林隆司 (2006) 関東東山病害虫研究会報 第53集. 11) Schreiner, I. (2000) Agricultural Pests of the Pacific. 12) Singh, R. N. (1969) Labdev Journal of Science and Technology, B (Life Sciences), 7(3): 205-206. 13) 高良鉄夫・東清二 (1970) 沖縄農業, 9(1): 19-30. 14) 東京都 (2005) 平成17年度 病害虫発生予察情報 特殊報 第2号.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
62	節足動物	*Brevipalpus phoenicis*	ミナミヒメハダニ	ダニ目 (Acarina)	ヒメハダニ科 (Tenuipalpidae)	インド、インドネシア、スリランカ、タイ、台湾、中華人民共和国、日本（奄美大島、沖縄、鹿児島）、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、イエメン、イスラエル、イラン、オマーン、シリア、トルコ、レバノン、イタリア、ウクライナ、オーストリア、オランダ、キプロス、ギリシャ、ジョージア、スペイン、タジキスタン、ハンガリー、フランス、ポーランド、ポルトガル、アンゴラ、ウガンダ、エジプト、エチオピア、カメルーン、ケニア、コンゴ民主共和国、ジンバブエ、スーダン、セントヘレナ、タンザニア、中央アフリカ、チュニジア、ナイジェリア、ブルンジ、マラウイ、南アフリカ共和国、モーリシャス、モーリタニア、モザンビーク、モロッコ、ルワンダ、レユニオン、アメリカ合衆国、アルゼンチン、エクアドル、エルサルバドル、ガイアナ、キューバ、グアテマラ、グアドループ、コスタリカ、コロンビア、ジャマイカ、チリ、ドミニカ共和国、トリニダード・トバゴ、パナマ、パラグアイ、プエルトリコ、ブラジル、ベネズエラ、ボリビア、ホンジュラス、メキシコ、小アンティル諸島、オーストラリア、クック諸島、サモア、ソロモン、トンガ、ニューカレドニア、ニュージーランド、ノーフォーク島、パプアニューギニア、ハワイ諸島、フィジー、フランス領ポリネシア	パパイヤ、チャ、カンキツ属等を含む51科107種の植物	体長は、雄成虫0.268mm、雌成虫0.277～0.34mm。繁殖は基本的に雌性単生殖。雌1匹あたり平均22.5-56.7個の卵を産卵。卵は果実表面の割れ目等に通常4～8個の房状に産卵される。温暖な気候下では繁殖は通年行われる。 下位葉の主脈上に寄生し、葉の表皮に穴を開け、細胞の内容物を吸う。食害部の反対側の葉面に黄色い水疱状の症状を引き起こしたり、加害部が褐色となり、葉が部分的に壊死したりする。多発すると葉は光沢がなくなり、新葉では葉辺が縮れ，成葉では葉縁から黄化・褐変し落葉する。 茎や若枝を加害し、樹皮の退色、甘露又はすす病菌の形成、加害部に黒いかびが発生する。枝では表面のくぼみに沿ってコロニー状に寄生し、多発した場合は枝が枯死する。 なお、植物防疫法施行規則別表1に掲げる検疫有害植物であるCitrus leprosis virus Cのベクターとなるとの情報があるが、国内外で異なる系統・変異等が存在する旨の報告はない。	・ 薬剤散布（ハダニ類で登録農薬がある。なお、塩化炭化水素、ジコホール、テトラジホン、有機リン酸塩、エチオン、キナルホス、ジノカップ、ブロモプロピレート、キノメチオネート、ジコホール及びテトラジホンの混合薬剤が有効。） ・ 生物農薬の導入（昆虫病原菌（*Hirsutella thompsonii*）） ・ 適切な剪定	本種は国内未発生の病原体（Citrus leprosis virus C）を媒介するとの情報がある。一般にウイルス等の病原体は栽培用の宿主植物を経路して侵入するおそれが高いと考えられていることから、栽植用植物に付着する本種は検疫措置の対象と判断される。 一方、消費用寄主植物に付着する本種については、本種が日本既発生であること、一般に消費物から他の作物に病原体を伝搬する可能性は極めて低いとされることから、検疫措置の必要は無いと判断される。 以上のことから、非検疫有害動植物（栽培の用に供する植物に付着するものを除く。）に該当する。	1) Berry, J. A. and F. Qing-hai (2012) Biological notes and risk status of Brevipalpus phoenicis (Geijskes, 1939) (Acari: Tenuipalpidae) in New Zealand Systematic and Applied Acarology, 17(2). 2) CABI (2015) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/11/20). 3) CABI (2015) Citrus leprosis virus C (leprosis of citrus) Crop Protection Compendium. (online), (Updated_2015/11/24). 4) Catalogue of life (2016) Catalogue of life. (online), (Accessed_2016/04/26). 5) Chagas, C. M., E. W. Kitajima and J. C. V. Rodrigues (2003) Experimental and Applied Acarology, 30: 203-213. (online). 6) Childers, C. C., E. W. Kitajima., W. C. Welbourn., C. Rivera., R. Ochoa (2001) Brevipalpus mites on citrus and their status as vectors of citrus leprosis Manejo Integrado de Plagas (Costa Rica), 60: 66-70. (online). 7) 江原昭三 編 (1980) 日本ダニ類図鑑. 8) EPPO (2016) PQR - EPPO. (online), (Accessed_2016/04/25). 9) EPPO (2016) Coffee ringspot virus. PQR - EPPO. (online), (Accessed_2016/05/11). 10) Ferreira, P. T. O., E. C. Locali-Fabris., J. Freitas-Astúa., R. Antonioli-Luizon., R. T. Gomes., M. A. Machado and E. W. Kitajima (2007) Summa Phytopathologica, 33(3). 11) Gomes, R. T., E. W. Kitajima., F. A. O. Tanaka., J. P. R. Marques and B. Appezzato-da-Gloria (2010) Summa phytopathol, 36(4). 12) Haramoto, F. H. (1969) Biology and control of Brevipalpus phoenicis(GEIJSKES)(ACARINA: TENUIPALPIDAE). 13) Hoy, M. A. (2011) Agricultural Acarology Introduction to Integrated Mite Management: 125-133. 14) 鹿児島県 (2012) 平成24年度病害虫発生予察特殊報 第1号. 15) Kitajima, E. W., C. M. Chagas and J. C. V. Rodrigues (2003) Experimental and Applied Acarology 30: 135-160. 16) Kitajima, E. W., J. A. M. Rezende and J. C. V. Rodrigues (2003) Experimental and applied Acarology, 30: 225-231. 17) Kitajima, E. W., J. C. V. Rodrigues and J. Freitas-Astua (2010) Scientia Agricola, 67: 348-371. 18) Krantz, G. W. and D. E. Walter (2009) a manual of ACAROLOGY: 301. 19) Vacante, V. (2010) CITRUS MITES Identification, Bionomy and Control: 143-150.
63	糸状菌	*Stemphylium vesicarium*	ネギ葉枯病菌	Pleosporales	Pleosporace ae	汎世界的に発生（日本を含む。）	アスパラガス、アルファルファ、セイヨウナシ、ダイズ、タマネギ、トマト、ニンニク、ネギ、ホウレンソウ、マンゴウ、リーキ	葉枯病、白斑病の病原菌。病徴は、ネギでは葉に中央が褐色～黒褐色、周辺部が淡褐色の紡錘形病斑を生じ、拡大して発病部位から先が枯れる。土中の罹病植物の残渣でおもに偽子のう殻の形で越年し、翌年子のう胞子を生じて飛散する。以後は病斑上に生じた分生子により飛散、まん延する。ネギ属に寄生する*Stemphylium* 属菌は一般的に病原性が弱く、べと病菌やさび病菌による被害部に二次的に寄生する。 なお、国内外で宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない。	・ 発生初期に薬剤を散布（登録農薬あり）。 ・ り病植物の残渣は処分する。	本菌は、日本に分布し、宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1)Farr, D.F. and A.Y. Rossman (2017) Fungal database, Systematic Mycology and Microbiology Laboratory, ARS, USDA. 2)三澤知央(2012) ネギ葉枯病の発生生態と防除に関する研究。北海道立総合研究機構. 農業試験場報告 132:1-92. 3)日本植物病害大事典
64	ウイルス	*Grapevine fleck virus*	ブドウフレックウイルス	Tymovirales	Tymoviridae	インド、大韓民国、中華人民共和国、日本（山形県、福島県、東京都、山梨県、新潟県、長野県、岡山県、島根県、大分県）、イラン、シリア、レバノン、パレスチナ、ヨルダン、イタリア、英国、クロアチア、コソボ、スイス、スペイン、スロバキア、スロベニア、セルビア、チェコ、ハンガリー、フランス、ブルガリア、ポーランド、北マケドニア共和国、アルジェリア、エジプト、南アフリカ、アメリカ合衆国、カナダ、ブラジル、チリ、オーストラリア、ニュージーランド	ブドウ属	多くの穂木品種や台木の品種が潜在感染している。Grapevine leaf roll virus等の他のウイルスとの複合感染により、葉の黄化、葉巻、モザイクなどの症状を生じる。検定植物のセント・ジョージでは退緑斑や第3、4葉脈に典型的な透過を生じ、激しく感染すると葉身が上方にカールし奇形になる。接ぎ木伝染するがそれ以外の伝染は知られていない。海外では被害はないとされている。 なお、国内外で、ウイルスの性状、症状、病原性等に差異があるとの報告はない。	・ ウイルスフリー苗を利用が唯一の防除法である。熱処理と茎頂培養法により無毒化ができるとの報告がある。	本種は日本に分布し、国内外で、ウイルスの性状、症状、病原性等に差異があるとの報告はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1)Brunt, A. A., K. Crabtree, M. J. Dallwitz, A. J. Gibbs, L. Watson and E. J. e. Zurcher (1996) Plant Viruses Online: Descriptions and Lists from the VIDE Database. Grapevine fleck virus. (online), (accessed 2019-07-24). 2)EPPO (2001) Grapevine fleck virus. EPPO Global Database. (online), (accessed 2019-07-31). 3)中野正明・中畝良二 (2005) ブドウウイルス病とその判別法. （独）農業・生物系特定産業技術研究機構 果樹研究所 ブドウ・カキ研究部. (online), (accessed 2019-07-24). 4)Sabanadzovic, S., N. Aboughanem-Sabanadzovic and G. P. Martelli (2017) Grapevine fleck and similar viruses. In Grapevine Viruses: Molecular Biology, Diagnostics and Management (pp. 331-349). Springer, Cham, Switzerland. 5)田中寛康 (1998) ブドウウイルス病. 日本植物病害大事典(岸國平 編). 全国農村教育協会 東京 日本: 842-843.

No	分類	学名	和名	目名	科名	発生地域	寄主植物	生態、症状等（媒介性又は非媒介性、系統、変異、国内と海外での被害の差、耐性等に関する情報を含む。）	防除	結論	引用文献
65	ウイルス	*Grapevine rupestris stempitting - associated virus*（Grapevine vein necrosisの症状はGRSPaVの系統の一種による症状）	ブドウステムピッティング随伴ウイルス	Tymovirales	Betaflexiviridae	中華人民共和国、日本、トルコ、シリア、イタリア、英国、フランス、ギリシャ、ポルトガル、スロベニア、南アフリカ、 カナダ、アメリカ合衆国、ブラジル、オーストラリア	ブドウ属	検定植物であるセント・ジョージでは、樹皮を剥ぐと木部にピッティング（小さな窪みや溝）症状を呈する。また、検定植物110R（*Vitis rupestris* x *V. berlandieri*）では葉の裏側の葉脈にえそ（vein necrosis）を生じる。接ぎ木伝染するが、媒介虫による伝搬は知られていない。GRSPaVは、塩基配列において多様な変異体を含んでおり、日本未発生の系統が存在する可能性がある。 なお国内外に存在するウイルス系統間で、樹勢の低下、収量の減少など経済的被害に明確な差が出るとの報告はない。	ウイルスフリー苗の利用が唯一の防除法である。	本種は日本に分布し、日本と世界に存在するウイルス系統間において樹勢の低下、収量の減少など経済的被害に明確な差が出るとの報告はない。以上のことから、非検疫有害動植物に該当する。	1) Meng, B. and A. Rowhani（2017）Grapevine rupestris stem pitting – associated virus. In: Grapevine Viruses: Molecular Biology, Diagnostics and Management.（Meng, B., G. P. Martelli, D. A. Golino and M. Fuchs, eds.）pp. 257-287. Geneva, NY, USA. Springer International Publishing. 2)Nakaune, R., K. Inoue, H. Nasu, K. Kakogawa, H. Nitta, J. Imada and M. Nakano（2008）Detection of viruses associated with rugose wood in Japanese grapevine and analysis of genomic variability of Rupestris stem pitting – associated virus. J Gen Plant Pathol 74: 156-163. 3)中野正明・中畝良二（2005）ブドウウイルス病とその判別法,（独）農業・生物系特定産業技術研究機構　果樹研究所　ブドウ・カキ研究部.（Online）,（accessed 2019_01_31） 4)Terlizzi, F., Ratti, C., Filippini, G., Pisi, A. and Credi, R.（2010）Detection and molecular characterization of Italian Grapevine rupestris stem pitting-associated virus isolates. Plant pathology 59: 48-58.